

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報

平成元年度

1990.8

香川県教育委員会
(財)香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団高松建設局

例 言

1. 本書は、四国横断自動車道(高松～善通寺)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報で、平成元年度事業概要を収録した。
2. 本調査は、香川県教育委員会が日本道路公団高松建設局から受託し、委員会の指導のもとに(財)香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 調査組織(平成元年度)

(財)香川県埋蔵文化財調査センター

| | | | | | |
|----|--------|-------|-------|-------|--|
| 総括 | 所長 | 十川 泉 | | | |
| | 次長 | 安藤 道雄 | | | |
| 総務 | 係長 | 加藤 正司 | | | |
| | 主査 | 山地 修 | | | |
| | 主事 | 三宅 浩司 | | | |
| 調査 | 参事 | 見勢 護 | 技師 | 和田 素子 | |
| | 文化財専門員 | 真鍋 昌宏 | 技師 | 山下 平重 | |
| | 文化財専門員 | 広瀬 直樹 | 技師 | 森下 英治 | |
| | 主任技師 | 金丸 真明 | 技師 | 蔵本 晋司 | |
| | 主任技師 | 牧野 啓造 | 技師 | 宮崎 哲治 | |
| | 主任技師 | 植松 邦浩 | 技師 | 佐藤 竜馬 | |
| | 主任技師 | 岡 敦憲 | 調査技術員 | 山本 健 | |
| | 主任技師 | 西岡 達哉 | 調査技術員 | 大前 智司 | |
| | 主任技師 | 真鍋 嘉宏 | 調査技術員 | 高橋佳緒里 | |
| | 技師 | 大西 義則 | 調査技術員 | 香川 敏美 | |
| | 技師 | 中野 昇一 | 調査技術員 | 萬木 一郎 | |
| | 技師 | 渡辺 茂智 | 調査技術員 | 谷澤 幸司 | |
| | 技師 | 片桐 孝浩 | 調査技術員 | 細川 ルミ | |
| | 技師 | 藤川 善規 | 調査技術員 | 高橋加奈子 | |
| | 技師 | 大林 修三 | 調査技術員 | 大西二美子 | |
| | 技師 | 大谷 伸一 | 調査技術員 | 片山 恭子 | |
| | 技師 | 木下 晴一 | 調査技術員 | 寺井 香吏 | |
| | 技師 | 古野 徳久 | | | |

4. 調査にあたって下記機関の協力を得た。記して謝意を表したい。(順不同・敬称略)

香川県土木部横断道対策室・同善通寺土木事務所横断道対策課・同坂出土木事務所横断道対策課・同高松土木事務所横断道対策課・善通寺市都市計画課・丸亀市土木部高速自動車道担当
・国分寺町建設課・四国横断自動車道建設善通寺市龍川地区対策協議会・同丸亀市郡家地区対策協議会・同川西地区対策協議会・同飯野地区対策協議会・同国分寺地区対策協議会・同中間地区対策協議会・各地元自治会

5. 本書の執筆は各遺跡調査担当職員が分担し、真鍋が編集を担当した。

6. 本書で使用した遺構略号は、下記の通りである。

| | | |
|--------------|-------------|------------|
| S B (掘立柱建物跡) | S H (竪穴住居跡) | S D (溝状遺構) |
| S K (土坑) | S P (柱穴) | S R (自然河川) |
| S T (墓) | S X (不明遺構) | S E (井戸) |
| S A (柵列) | S F (窯跡) | |

7. 挿図の一部に国土地理院地形図(1/25,000)を使用した。

本文目次

| | |
|------------------|----|
| I 平成元年度発掘調査事業概要 | 1 |
| II 各遺跡の調査 | 5 |
| 1. 龍川五条遺跡 | 5 |
| 2. 龍川四条遺跡 (A 地区) | 13 |
| 3. 龍川四条遺跡 (B 地区) | 20 |
| 4. 三条番ノ原遺跡 | 24 |
| 5. 郡家原遺跡 | 25 |
| 6. 郡家一里屋遺跡 | 29 |
| 7. 川西北・鍛冶屋遺跡 | 31 |
| 8. 飯山一本松遺跡 | 39 |
| 9. 綾南奥下池南遺跡 | 45 |
| 10. 国分寺下日名代遺跡 | 55 |
| 11. 国分寺六ツ目古墳 | 61 |
| 12. 国分寺六ツ目遺跡 | 70 |
| 13. 中間西井坪遺跡 | 75 |

挿 図 目 次

| | |
|---------------------------------|-------|
| 第1図 調査遺跡位置図 | 4 |
| (龍川五条遺跡) | |
| 第2図 遺跡周辺地形図 | 6 |
| 第3図 主要遺構配置図 | 9～10 |
| 第4図 遺物実測図 | 8 |
| (龍川四条遺跡A地区) | |
| 第5図 遺跡周辺地形図 | 13 |
| 第6図 遺構配置概略図 | 15～16 |
| 第7図 SR02木本質泥炭層中出土土器実測図 | 17 |
| (龍川四条遺跡B地区) | |
| 第8図 遺跡周辺地形図 | 20 |
| 第9図 灰釉陶器実測図 | 21 |
| (三条番ノ原遺跡) | |
| 第10図 遺跡周辺地形図 | 24 |
| (郡家原遺跡) | |
| 第11図 遺跡周辺地形図 | 25 |
| 第12図 石器実測図 | 26 |
| 第13図 掘立柱建物跡配置図 | 27～28 |
| (郡家一里屋遺跡) | |
| 第14図 遺跡周辺地形図 | 29 |
| 第15図 石器実測図 | 30 |
| (川西北・鍛冶屋遺跡) | |
| 第16図 遺跡周辺地形図 | 31 |
| 第17図 遺構配置図－Ⅱ区－ | 32 |
| 第18図 地区割図及び川西北・鍛冶屋遺跡にみられる条里方向の溝 | 33～34 |
| (飯山一本松遺跡) | |
| 第19図 遺跡周辺地形図 | 39 |
| 第20図 A地区トレンチ配置図 | 40 |
| 第21図 B地区トレンチ配置図 | 41 |
| 第22図 出土土器実測図 | 41 |

(綾南奥下池南遺跡)

| | | |
|------|-------------------|-------|
| 第23図 | 遺跡周辺地形図 | 46 |
| 第24図 | 十瓶山窯跡群分布図(須恵器窯のみ) | 46 |
| 第25図 | トレンチ・遺構配置図 | 47~48 |
| 第26図 | 窯体実測図 | 49 |
| 第27図 | 窯体内遺物出土状況 | 50 |
| 第28図 | 窯体内出土須恵器(1)鉢・壺 | 52 |
| 第29図 | 窯体内出土須恵器(2)甕 | 53 |
| 第30図 | 窯体内出土須恵器(3)甕 | 54 |

(国分寺下日名代遺跡)

| | | |
|------|----------------|----|
| 第31図 | 遺跡周辺地形図 | 55 |
| 第32図 | 遺構平面図(1区) | 56 |
| 第33図 | 動物の足跡検出状況(1区Ⅱ) | 58 |
| 第34図 | 遺物実測図 | 59 |

(国分寺六ツ目古墳)

| | | |
|------|---------|----|
| 第35図 | 遺跡周辺地形図 | 61 |
| 第36図 | 墳丘測量図 | 63 |

(国分寺六ツ目遺跡)

| | | |
|------|---------|----|
| 第37図 | 遺跡周辺地形図 | 70 |
| 第38図 | 遺構配置図 | 71 |

(中間西井坪遺跡)

| | | |
|------|---------------------|----|
| 第39図 | 遺跡周辺地形図 | 75 |
| 第40図 | 南東隅調査区遺構配置略図 | 76 |
| 第41図 | S R 8 9 0 2 出土遺物実測図 | 77 |

写 真 目 次

(龍川五条遺跡)

| | | |
|------|--------------|------|
| 写真1 | Ⅲ区SR01遺物 | 6 |
| 写真2 | Ⅲ区SD04・05 | 6 |
| 写真3 | I区遺構群 | 7 |
| 写真4 | Ⅱ区遺構群 | 7 |
| 写真5 | Ⅱ区SK22 | 9~10 |
| 写真6 | Ⅱ区SD08 | 9~10 |
| 写真7 | Ⅱ区SD06 | 9~10 |
| 写真8 | Ⅲ区SK15 | 8 |
| 写真9 | I区SB01 | 8 |
| 写真10 | Ⅲ区SH01 | 11 |
| 写真11 | Ⅲ区SH01土器出土状況 | 11 |
| 写真12 | Ⅲ区SK07・08 | 12 |
| 写真13 | 現説風景 | 12 |

(龍川四条遺跡A地区)

| | | |
|------|------------------|----|
| 写真14 | 遺跡付近空中写真 | 14 |
| 写真15 | SR02掘削状況 | 14 |
| 写真16 | SR01掘削状況 | 17 |
| 写真17 | SR02草本質泥炭層土器出土状況 | 18 |
| 写真18 | SR01木製品出土状況 | 18 |
| 写真19 | 旧流路の断面(SR05) | 18 |
| 写真20 | SD03・04等掘削状況 | 19 |
| 写真21 | 土取り跡 | 19 |
| 写真22 | 段丘崖(明灰色粘質土) | 19 |

(龍川四条遺跡B地区)

| | | |
|------|------------|----|
| 写真23 | 掘立柱建物跡(1) | 22 |
| 写真24 | 掘立柱建物跡(2) | 22 |
| 写真25 | 掘立柱建物跡伴出遺物 | 23 |
| 写真26 | 火葬墓 | 23 |

(三条番ノ原遺跡)

| | | |
|------|-------|----|
| 写真27 | 調査区全景 | 24 |
|------|-------|----|

(郡家一里屋遺跡)

写真28 遺構検出状況……………29

(川西北・鍛冶屋遺跡)

写真29 I区②SD01……………33～34

写真30 II区③SD03……………33～34

写真31 III区①SD08……………33～34

写真32 IV区①SR01……………33～34

写真33 IV区②SD01……………33～34

写真34 I区①全景(東から)……………35

写真35 I区②全景(東から)……………35

写真36 I区①貯水遺構(モルタル)……………35

写真37 I区①貯水遺構(木タル)……………35

写真38 I区①大甕出土状況(野ツボ)……………35

写真39 I区②SD01土師皿出土状況……………35

写真40 II区①全景(北から)……………36

写真41 II区③全景(南から)……………36

写真42 II区③SE02(東から)……………36

写真43 II区①SX01(南から)……………36

写真44 III区①全景(東から)……………37

写真45 III区②全景(東から)……………37

写真46 III区②弥生土器底部出土状況(溝から)……………37

写真47 III区②甕出土状況(溝から)……………37

写真48 III区②甕出土状況(溝から)……………37

写真49 III区②杯身出土状況(溝から)……………37

写真50 IV区①全景(西から)……………38

写真51 IV区①L字型溝石組……………38

写真52 IV区①L字型溝遺物出土状況……………38

写真53 IV区①土坑甕出土状況……………38

写真54 IV区②近世掘立柱建物跡……………38

写真55 IV区②SD01須恵器出土状況……………38

(飯山一本松遺跡)

写真56 A地区遠景(東から)……………42

写真57 B地区完掘状況全景(東から)……………42

| | | |
|------|----------------------|----|
| 写真58 | B地区SX8901遺物出土状況（東から） | 43 |
| 写真59 | A地区塹壕跡完掘状況（南から） | 43 |
| 写真60 | 備後薬師堂調査中状況（西から） | 44 |

(綾南奥下池南遺跡)

| | | |
|------|-------------------|----|
| 写真61 | 窯跡遠景（北から） | 46 |
| 写真62 | 窯体検出状況 | 49 |
| 写真63 | 窯体内覆土堆積状況（b-b'断面） | 50 |
| 写真64 | 窯体内遺物検出状況 | 50 |
| 写真65 | 窯体完掘状況 | 51 |
| 写真66 | 窯体完掘状況（上方から見る） | 51 |
| 写真67 | 窯体側壁細部 | 51 |
| 写真68 | 窯体断ち割り状況（b-b'断面） | 52 |
| 写真69 | 作業風景 | 54 |

(国分寺下日名代遺跡)

| | | |
|------|--------------|----|
| 写真70 | 調査区より北西を望む | 57 |
| 写真71 | 1区1全景 | 57 |
| 写真72 | 1区SD04土器出土状況 | 57 |
| 写真73 | 旧河道 | 57 |
| 写真74 | 動物の足跡検出状況(1) | 58 |
| 写真75 | 動物の足跡検出状況(2) | 58 |
| 写真76 | 3区IVSD01 | 58 |
| 写真77 | 石鏃（やじり） | 60 |
| 写真78 | 石庖丁 | 60 |
| 写真79 | 石匙 | 60 |
| 写真80 | 打製石斧 | 60 |
| 写真81 | 石帯（表） | 60 |
| 写真82 | 石帯（裏） | 60 |

(国分寺六ツ目古墳)

| | | |
|------|-------------|----|
| 写真83 | 空中写真より | 62 |
| 写真84 | 古墳遠景 | 64 |
| 写真85 | 墳丘全景（側面） | 64 |
| 写真86 | 墳丘全景（前方部より） | 64 |
| 写真87 | 墳裾列石（東より） | 65 |

| | | |
|-------|-------------------|----|
| 写真88 | 墳裾列石（くびれ部） | 65 |
| 写真89 | 墳裾列石（後円部） | 65 |
| 写真90 | 主体部全景（東より） | 66 |
| 写真91 | 第1主体（北より） | 66 |
| 写真92 | 第1主体副葬品出土状況（南より） | 66 |
| 写真93 | 第1主体鉄刀出土状態（東より） | 67 |
| 写真94 | 第1主体鉄器出土状態（南より） | 67 |
| 写真95 | 第1主体土器出土状況（東より） | 67 |
| 写真96 | 第2主体（東より） | 68 |
| 写真97 | 第3主体蓋石検出状況（北東より） | 68 |
| 写真98 | 第3主体（北東より） | 68 |
| 写真99 | 後円部墳丘断ち割り状況（東より） | 69 |
| 写真100 | 墳丘断ち割りトレンチ断面（西より） | 69 |
| 写真101 | 第1主体出土土器 | 69 |

(国分寺六ツ目遺跡)

| | | |
|-------|---------------------|----|
| 写真102 | 2区旧河道SR01（西より） | 72 |
| 写真103 | 3区全景（北より） | 72 |
| 写真104 | 6区全景（北より） | 72 |
| 写真105 | 1区不明遺構SX01（北東より） | 73 |
| 写真106 | 3区旧河道内土坑SK01（北東より） | 73 |
| 写真107 | 3区旧河道SR02土層断面（東より） | 73 |
| 写真108 | 3区擦石出土状態（北より） | 74 |
| 写真109 | 4区サヌカイト剥片集積上面（北東より） | 74 |
| 写真110 | 4区サヌカイト剥片集積下面（東より） | 74 |

(中間西井坪遺跡)

| | | |
|-------|-------------------------|----|
| 写真111 | 遺跡遠景（東から） | 78 |
| 写真112 | SR8901・8902全景（北から） | 79 |
| 写真113 | SR8901人形出土状況（東から） | 79 |
| 写真114 | SR8902中層遺物出土状況（南から） | 80 |
| 写真115 | SR8902内木器貯蔵穴遺物出土状況（西から） | 80 |
| 写真116 | 掘立柱建物跡検出状況（西から） | 81 |
| 写真117 | 竪穴住居跡検出状況（南から） | 81 |

I 平成元年度発掘調査事業概要

1. 調査の経過

平成元年度調査は、当初善通寺市龍川地区・丸亀市郡家地区・同市川西地区・同市飯野地区・坂出市川津地区・同市府中地区・飯山町地区・綾南町地区・国分寺町地区・高松市中間地区と全線で計125,812㎡を調査対象地とし、四月当初から前年度までに予備調査が終了している丸亀市川西地区及び前年度の継続事業になった同市郡家地区・飯山町地区に着手した。

これと平行して用地買収が進展した善通寺市龍川地区で4～5月に、国分寺町地区で6～8月に、高松市中間地区で5～6月に予備調査を実施し、順次本調査に移行した。

予備調査の結果、善通寺市龍川地区では未退去家屋部分、坂出市地区では用地買収、国分寺町地区では本調査の必要を認め無い等の理由により、調査面積に変更をきたし、最終的に87,908㎡について本調査を実施した。

本年度も昨年に引き続き、約半数の現場を工事請負事業とし、残りを直営事業として運営している。

2. 調査の概要

四国横断自動車道建設に伴う発掘調査事業も2年目を迎え、善通寺市龍川地区から高松市中間地区まではほぼ全線に調査区が展開した。調査成果の概要は次の通りである。

龍川五条遺跡では、今回の調査で主として弥生時代前期の墓域が確認された。検出した遺構としては、円形周溝墓・方形周溝墓(?)・木棺墓・土壙墓及び溝状遺構・自然河川等がある。この結果、香川県の弥生時代前期の墓制の一端が明らかになったと言える。またこれ以外に、古墳時代初頭の竪穴住居跡が1棟、古代の掘立柱建物跡等も検出されている。

龍川四条遺跡は、古代を中心とする集落遺跡で、掘立柱建物跡が数多く検出され、集落の東西南端を流れていた自然河川から縄文土器の出土も見られた。

三条番ノ原遺跡・郡家原遺跡はその大半を昭和63年度に発掘調査したが、部分的に残った未退去家屋跡を中心として調査を実施した。調査の結果、三条番ノ原遺跡では弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居跡を検出したほか、郡家原遺跡では古代の掘立柱建物跡及び溝状遺構を多数検出することが出来た。

郡家一里屋遺跡は、昭和63年度に遺跡の東西を調査し、今回は残っていた中央部を調査した。

川西北・鍛冶屋遺跡では中世から近世の掘立柱建物跡及び土坑等を検出している。

飯山一本松遺跡は、分布調査で土器の散布が認められたが、調査の結果遺構を検出することは出来なかった。後世の開墾等による影響と考えられる。

綾南奥下池南遺跡は、分布調査の段階から須恵器窯の存在が予想されていたが、調査で須恵器窯の先端部分を検出している。窯の大半は今回の事業地外であった。これ以外には窯の所在は確

認できていない。また、周辺の調査で縄文時代と推定される石器が確認されており、縄文時代の遺構の存在も予想されたが確認するには至らなかった。

国分寺下日名代遺跡は、本津川の西に広がり耕作にともない多くの遺物が採集されていることもあり、弥生時代から古代の大集落であろうと考えていたが、度重なる水田耕作に伴う地下げで大半の遺構が消滅しており、溝状遺構・自然河川等が検出されたにすぎない。ただ、自然河川の埋土上面で獣足の痕跡が数多く検出されたことは大きな成果であった。

国分寺六ツ目古墳は、国分寺町域で初めての前方後円墳であることが確認され、主体部も3基検出された。副葬品は余り多くなかったが、鉄器のほか古式土師器が墓壙内及び墳丘周辺で確認されたことは大きな成果であった。

国分寺六ツ目遺跡では、縄文時代と考えられる石器の製作跡等を確認することが出来た。

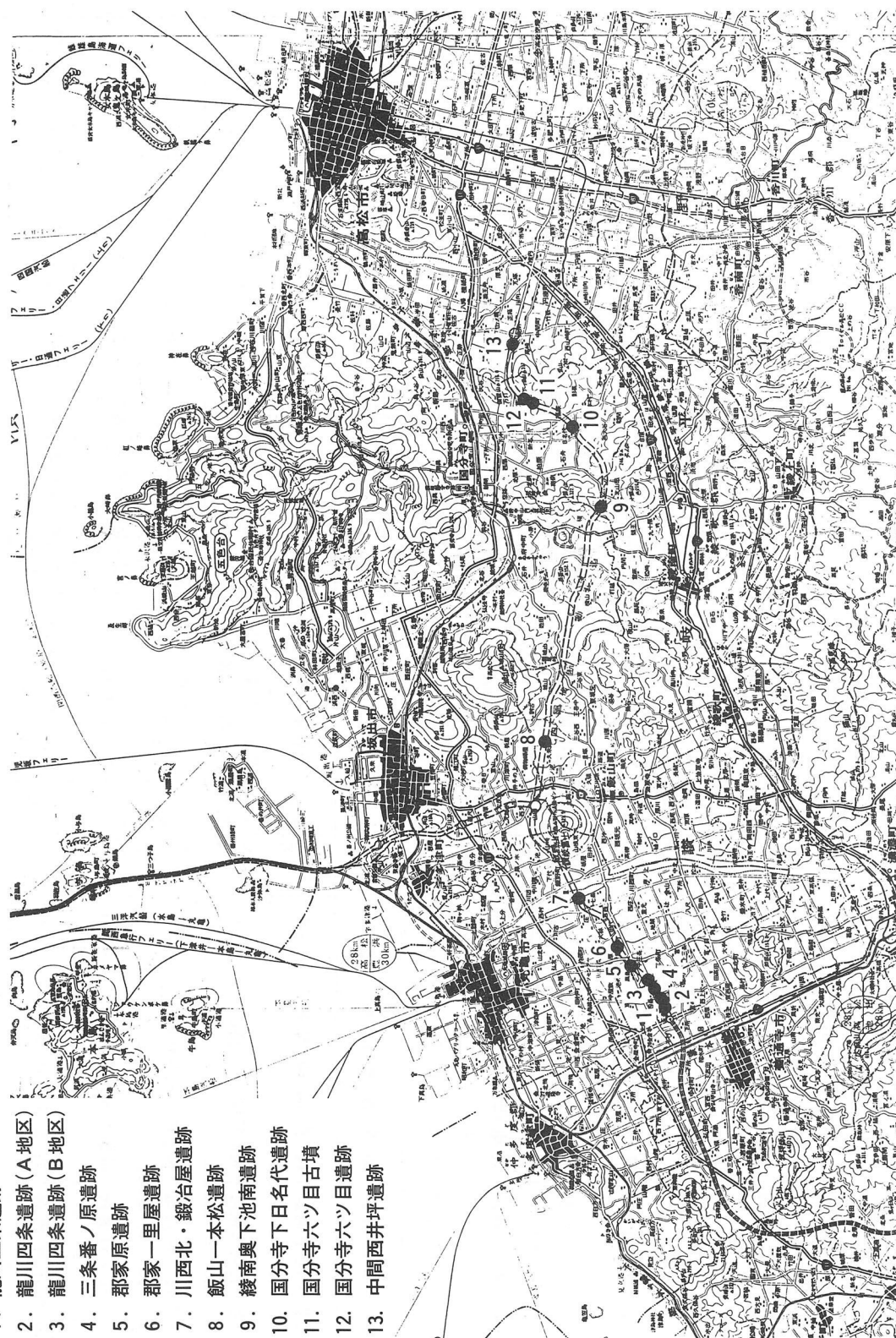
中間西井坪遺跡では、弥生時代末～古墳時代初頭・古代・中世・近世と幅広い時代の集落跡及びこれに伴う土器等の遺物が大量に出土した。

以上のように多くの成果を得たが、詳細については今後の整理をへて明らかにしていきたい。

| 遺跡名 | 所在地 | 調査面積 | 調査期間 | 遺構 | 遺物 | 担当者 | 備考 |
|-----------|-------------|--------|---------------------|---------------------|-------------------|-------------------------------|--------------------|
| 龍川五条遺跡 | 善通寺市原田町 | 12,300 | 元. 6.26~ 2.3.31 | 弥生時代墓・竪穴 住居跡・溝 | 弥生土器・須恵器 ・土師器 | 金丸・宮崎・高橋加・真鍋嘉 ・藤川・大谷・片山・細川 | 平成2年度以降 10,200㎡ |
| 龍川四条遺跡 | 善通寺市原田町・木徳町 | 18,200 | 元. 7.1~ 2.3.31 | 古代掘立柱建物跡 ・溝・自然河川 | 縄文土器・須恵器 ・土師器 | 木下・大西義・大前・山下・ 西岡・大林・細川 | 平成2年度以降 2,000㎡ |
| 三条番ノ原遺跡 | 丸亀市三条町 | 1,300 | 元. 4.10~ 2.3.31 | 弥生時代竪穴住居 跡・古代溝 | 弥生土器 | 藤川・片山 | 終了 |
| 郡家原遺跡 | 丸亀市郡家町 | 2,600 | 元. 4.10~ 2.3.31 | 古代掘立柱建物跡 ・溝 | 須恵器・土師器 | 岡・真鍋嘉・高橋佳・和田 | 終了 |
| 郡家一里屋遺跡 | 丸亀市郡家町 | 6,450 | 元. 4.10~ 2.3.31 | 古代溝・自然河川 | 弥生土器・須恵器 ・土師器 | 岡・真鍋嘉・高橋佳・和田・ 藤川・片山 | 終了 |
| 川西北・鍛冶屋遺跡 | 丸亀市川西町北 | 12,208 | 元. 4.10~ 元. 8.11 | 中世掘立柱建物跡 ・溝・自然河川 | 須恵器・土師器・ 近世陶磁器 | 山下・大谷・香川・藤川・和 田・片山 | 終了 |
| 飯野C・D・E遺跡 | 丸亀市飯野町 | 300 | 2.3.1~ 2.3.31 | | | 森下・大林 | 終了 |
| 飯山一本松遺跡 | 綾歌郡飯山町 | 2,200 | 元. 4.17~ 元. 5.16 | | 弥生土器・須恵器 ・土師器 | 広瀬・牧野・藏本・佐藤・山 本・萬木 | 終了 |
| 綾南奥下池南遺跡 | 綾歌郡綾南町 | 2,900 | 元. 5.22~ 元. 7.24 | 須恵器窯跡 | 須恵器 | 広瀬・佐藤・山本 | 終了 |
| 国分寺下日名代遺跡 | 綾歌郡国分寺町福家 | 11,350 | 元. 8.19~ 2.2.28 | 弥生時代溝,水田 跡・動物足跡 | 弥生土器・須恵器 ・土師器 | 渡辺・古野・大西二 | 終了 |
| 国分寺六ツ目古墳 | 綾歌郡国分寺町福家 | 900 | 元. 9.1~ 元. 12.28 | 前方後円墳・主体 部3基 | 鉄器・古式土師器 | 植松・谷澤・森下 | 終了 |
| 国分寺六ツ目遺跡 | 綾歌郡国分寺町福家 | 5,600 | 元. 10.1~ 2.2.28 | 中近世建物跡 | 石器・弥生土器・ 近世陶磁器 | 植松・谷澤・森下・佐藤・ 山本 | 終了 |
| 中間西井坪遺跡 | 高松市中間町 | 11,600 | 元. 8.19~ 2.3.25 | 弥生~近世建物跡 ・溝・土坑 | 弥生土器・須恵器 ・土師器 | 牧野・中野・藏本・萬木・ 寺井・山本 | 平成2年度以降 9,950㎡ |
| 計 | | 87,908 | | | | | |

第1表 調査遺跡一覽

1. 龍川五条遺跡
2. 龍川四糸遺跡(A地区)
3. 龍川四糸遺跡(B地区)
4. 三条番ノ原遺跡
5. 郡家原遺跡
6. 郡家一里屋遺跡
7. 川西北・鍛冶屋遺跡
8. 飯山一本松遺跡
9. 綾南奥下地南遺跡
10. 国分寺下日名代遺跡
11. 国分寺六ツ目古墳
12. 国分寺六ツ目遺跡
13. 中間西井坪遺跡



第一図 遺跡分布位置圖

Ⅱ 各遺跡の調査

1. 龍川五条遺跡

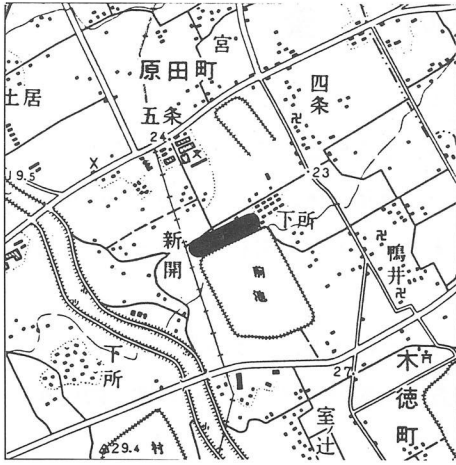
はじめに 当遺跡は金倉川の東側に位置し、南からのびる標高約23mの微高地を中心として立地する。調査区は西からⅠ～Ⅳ区に区切って調査した。遺跡全体にわたって後世の削平を受けていたがⅠ区は氾濫原にあたり、Ⅱ～Ⅳ区が微高地にあたることが判明した。以下、主な遺構について略述する。

〈Ⅰ区〉 調査区西半部で多数の溝状遺構を検出した。そのほとんどが平安～中世にかけてのものだが、弥生・古墳時代のものも数条みられる。調査区西端の自然河川からは縄文時代晩期の刻目突帯文土器片が数点出土している。

〈Ⅱ区〉 調査区東端からⅢ区西端にかけて自然河川を検出した。幅約35mの河川域の中に2本以上の流路を持っていたと考えられる。Ⅱ区東端で検出した流路(S R 01)は「く」字状に屈曲し、弥生時代前期の土器片・サヌカイト片等が出土している。自然河川の西岸には周溝墓と多数の土坑が集中する。円形周溝墓(S D 07・08)のうち、S D 07のほぼ中央には木棺を埋納した主体部が残る。S D 08・方形周溝墓(S D 06)の主体部は確認できていない。土坑の中には木棺墓(S K 16・22)も存在し、他の土坑も墓の可能性を持っている。いずれの遺構も遺物がほとんど無いが、S K 16からは碧玉製管玉6点が出土している。

〈Ⅲ・Ⅳ区〉 調査区西端で自然河川の旧流路(S R 01)を検出した。流路内からは多くの弥生時代前期の土器片とともに石器・木器(未製品)が出土している。また、自然河川の埋没後、N-30°-Wの方向で溝状遺構(S D 04・05)が掘られている。この溝は条里にともなうものと考えられる。自然河川の東岸には土坑が群在する。木棺墓(S K 07)・土壙墓(S K 01・08)が存在し、他の土坑も墓の可能性がある。また、東岸で竪穴住居(S H 01)を1棟検出した。一辺約5mの隅丸正方形の三辺に張り出しが付く。4本柱で壁溝をもつ。弥生時代終末の土器とともにガラス製小玉が1点出土している。Ⅲ区東半では多数のピットを検出した。現在のところ掘立柱建物3棟・円形住居2棟を確認している。ピットからは弥生土器細片が出土している。Ⅲ区東端からⅣ区にかけて平行しながら緩やかに弧を描く2条の溝状遺構(S D 01・02)を検出した。ともに弥生時代前期の土器を出土し、同時期に機能していたことがわかる。

小結 調査の結果、当遺跡は弥生時代を主とした複合遺跡であることが確認できた。Ⅱ・Ⅲ区の自然河川の両岸に築かれた多数の土坑は、弥生時代前期から中期にかけての墓と考えられる。また、Ⅲ区東端の2本の溝は弥生時代前期の環濠の可能性が強く、県下では中の池遺跡について2例目となる等、弥生時代前期を考えるうえで貴重な資料を得ることができたと言える。弥生時代前期から中期にかけての遺跡として著名な五条遺跡が、当遺跡の約500m北に所在しており、位置的・時期的に当遺跡との関連が考えられる。



第 2 図 遺跡周辺地形図

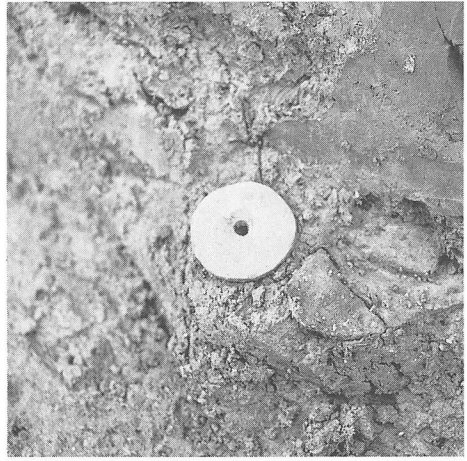


写真 1 III区SR01遺物

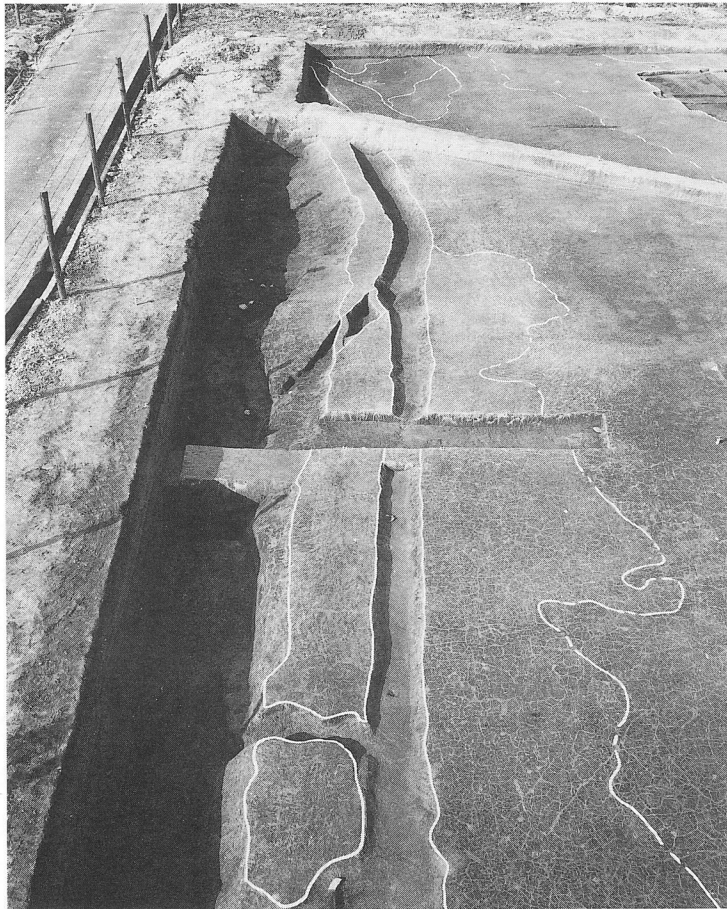


写真 2 III区SD04・05

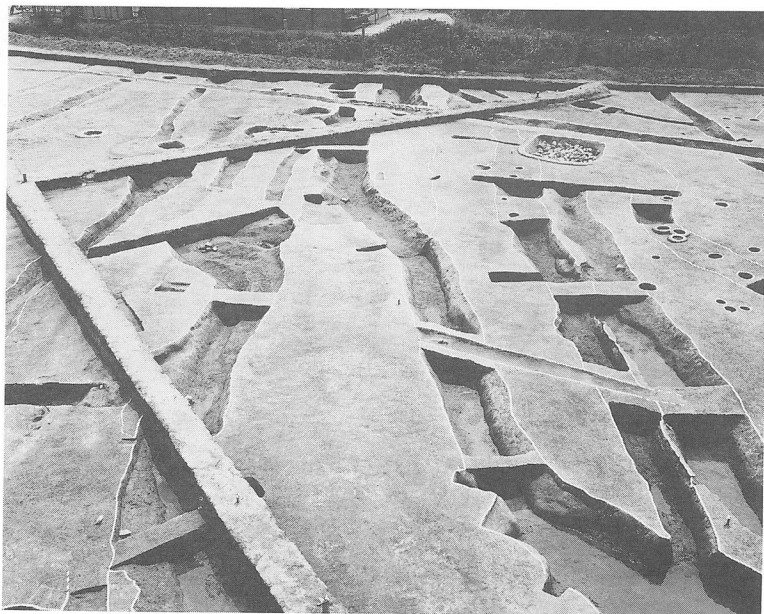


写真3 I区遺構群

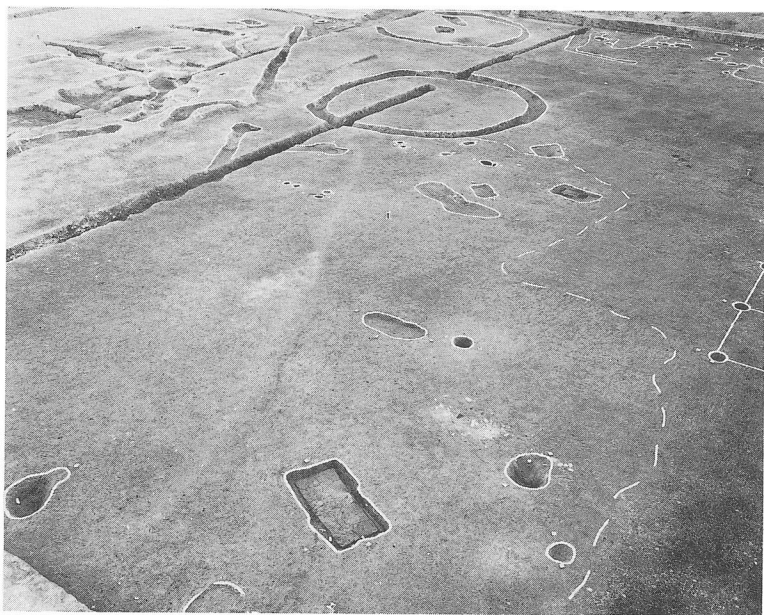


写真4 II区遺構群

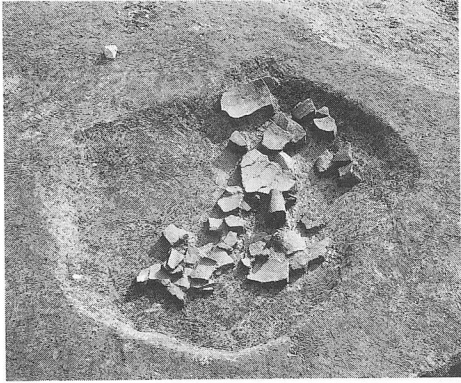


写真8 III区SK15

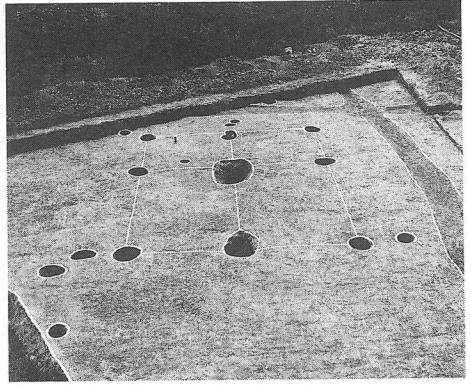
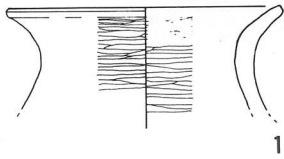
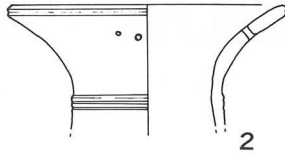


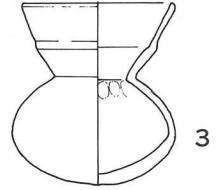
写真9 I区SB01



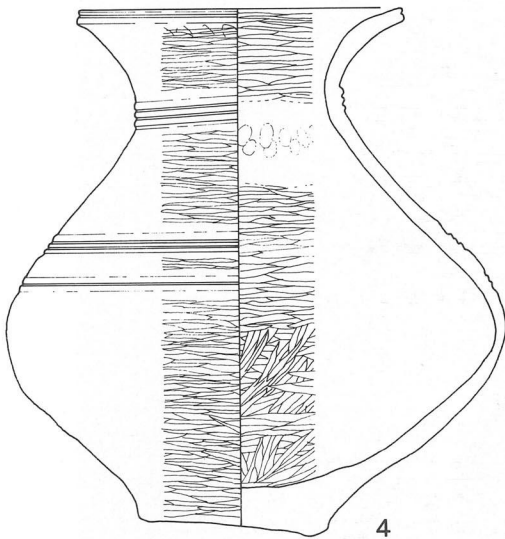
1



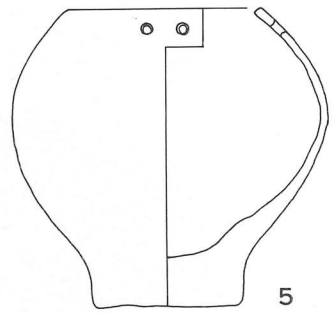
2



3



4

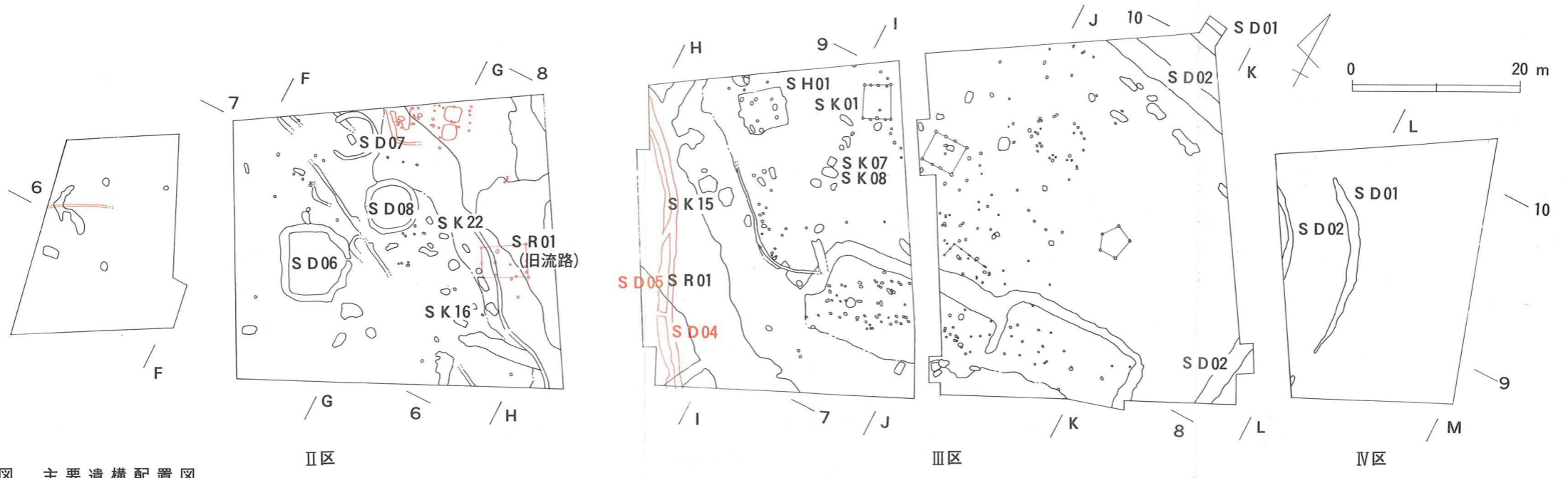


5



- 1・4 III区SR01
- 2・5 III区SD02
- 3 II区SH01

第4图 遺物実測図



第3図 主要遺構配置図

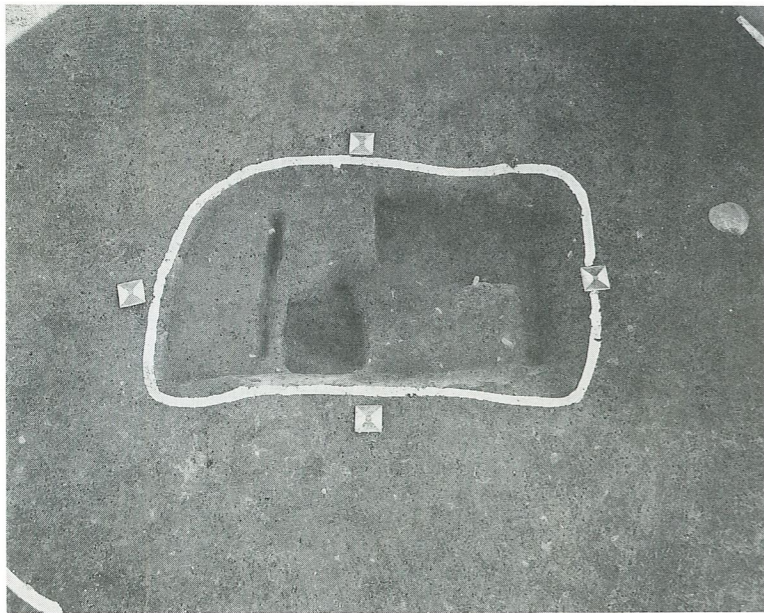


写真5 II区SK22



写真6 II区SD08



写真7 II区SD06

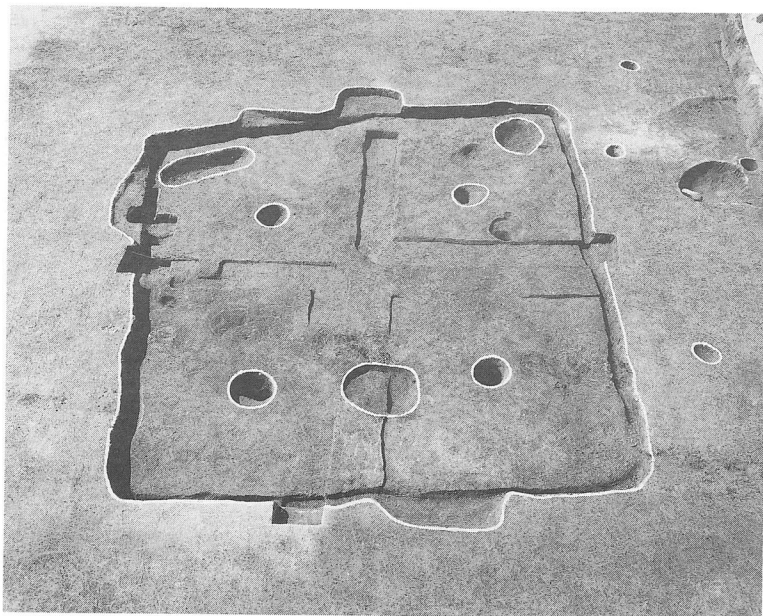


写真10 Ⅲ区SH01

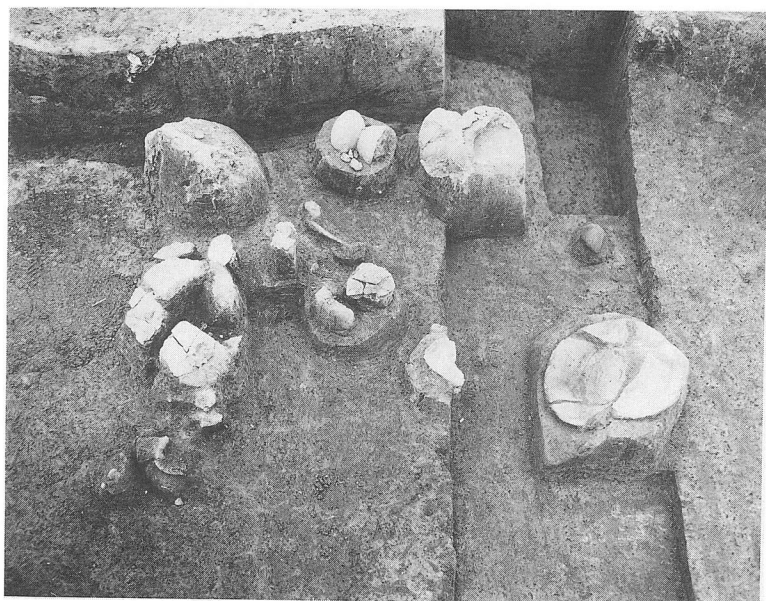


写真11 Ⅲ区SH01土器出土状況

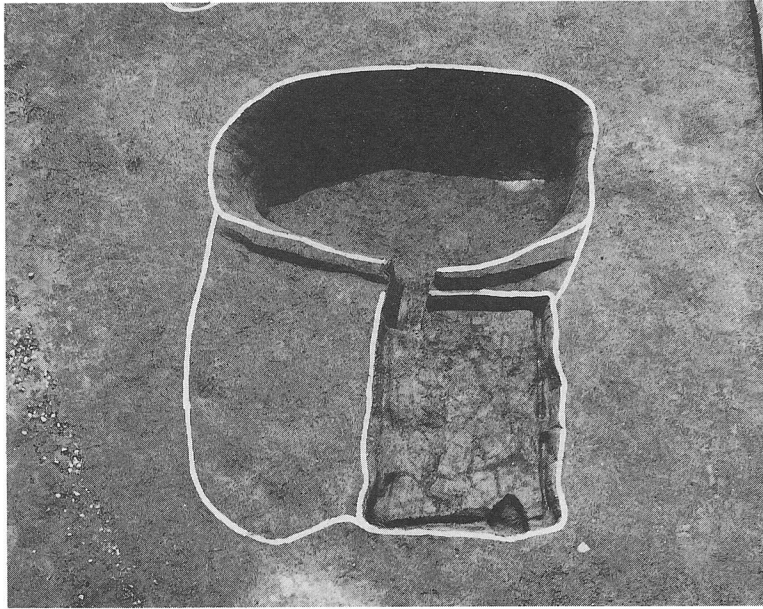


写真12 Ⅲ区SK07・08



写真13 現説風景

2. 龍川四条遺跡A地区

丸亀平野の空中写真を見ると、整然とした条里型地割を乱して、不規則な地割が細長く連続するのが幾条も認められる。この部分は周囲より微凹地となっており、過去の河道の跡と判断されている。本遺跡は、この旧河道を中心とする地点に位置する。

調査の結果、遺跡の西半1/3は、横断道の丸亀地域の調査でよく見られる明灰色粘質土層が耕作土直下に認められ、東側はこの層を開析する。幅約90mの狭義の氾濫原であることが判明した。以下に概要を記す。

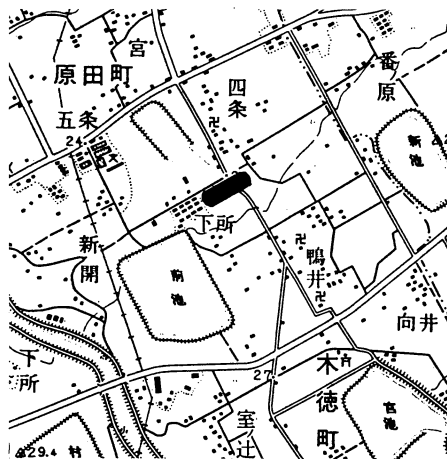
狭義の氾濫原は、幅5～15mの数条の流路によって埋積されている。このうち遺物が採集されたのは、縄文時代晩期・弥生時代後期のS R 02、12世紀後半頃のS R 01である。S R 02は幅約17m、深さ約1.5mの流路で、木本質泥炭層・草本質泥炭層の順で埋没している。木本質泥炭層中と河床の礫直上から、縄文時代晩期後半の突帯文土器片(二条突帯の深鉢・波状口縁の浅鉢を含む)が採集された。上層の草本質泥炭層中には弥生時代後期後半頃の土器溜りがあった。

S R 01は幅約9m、深さ約1mの流路で、埋没したS R 02を切り込んでいる。埋土は単一層で級化層理が認められる。調査区西北半に土器溜りがあり、12世紀後半頃と推定される完形に近い土器片が多数採集された。

この他の流路は砂で埋積されており、河床の礫と埋土の砂中の礫の薄層がよく似ること、湧水がはげしく河底まで掘りきれなかったことから正確な流路の復元は出来なかった。また、これらの流路の埋没後に黒褐色粘質土の溜り(S R 04・06)・旧流路(S R 07)が形成されるが、これらすべてにおいて遺物は認められなかった。

遺跡の西半には丸亀地区で地山とされる明灰色粘質土が見られる。しかし、この層は北にむけて2段の地下げ(粘土取り)をうけており、南側で検出された4条の溝も途中で消滅している。溝からは少量の土器細片が検出されたが年代は不明である。北側の土取り後の置土中には、時代幅を持った摩滅した土器細片が比較的多く含まれており、また人頭大の礫の集中する遺構(S X 01)が検出された。年代・性格については現在検討中である。

本遺跡の遺構は総じて遺存が悪く、希薄であり、遺物量もコンテナ(2.8ℓ)満載で45箱にとどまった。しかしながら、丸亀平野では始良 T n 火山灰の降下以降、縄文晩期後半までのある時期に河川が下刻し、周囲が段丘化したようで、地形発達やその後の土地利用などを検討するうえで貴重な資料を得ることができた。



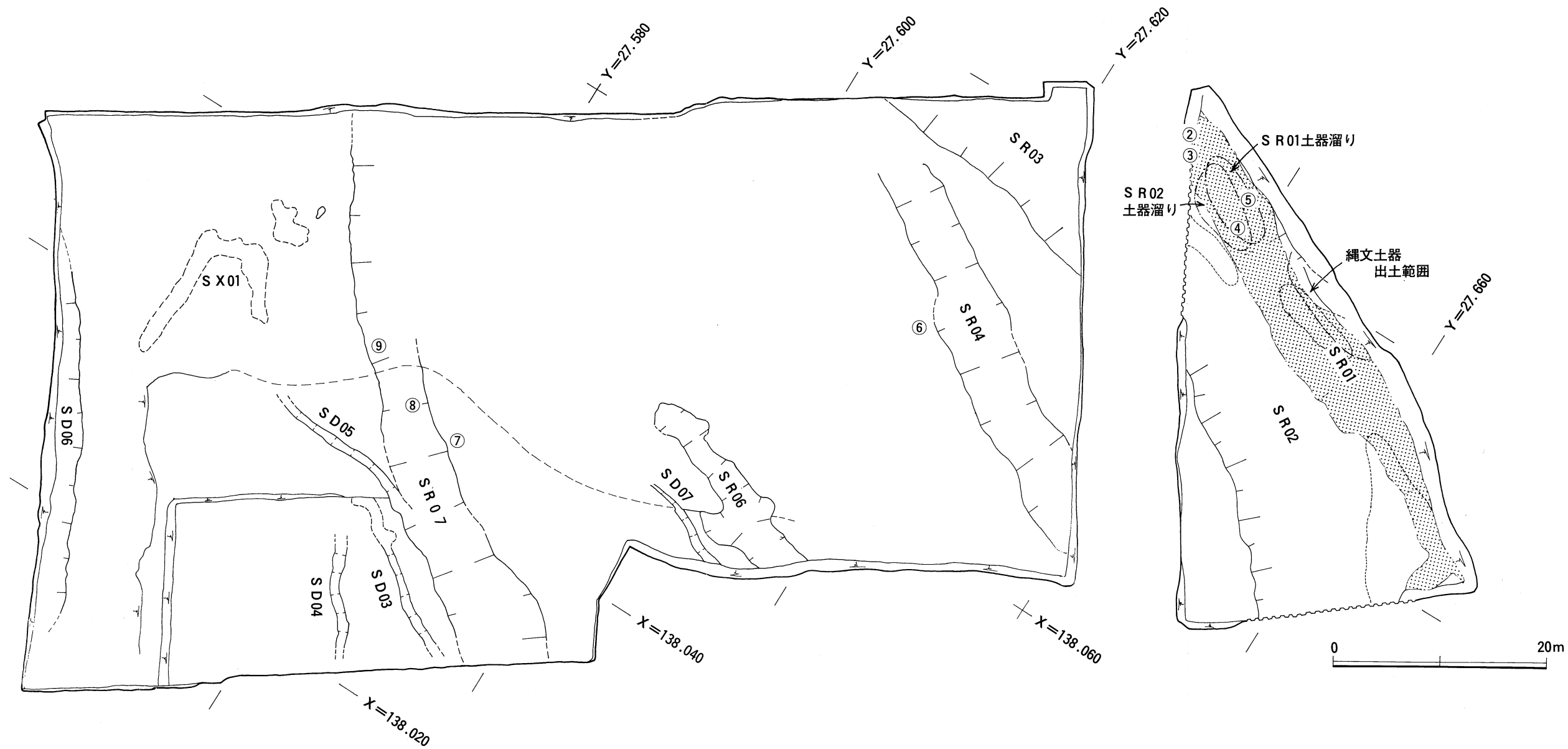
第5図 遺跡周辺地形図



写真14 遺跡付近空中写真



写真15 SR02 掘削状況



第 6 図 遺構配置概略図



第 7 図 SR02 木本質泥炭層中出土土器実測図

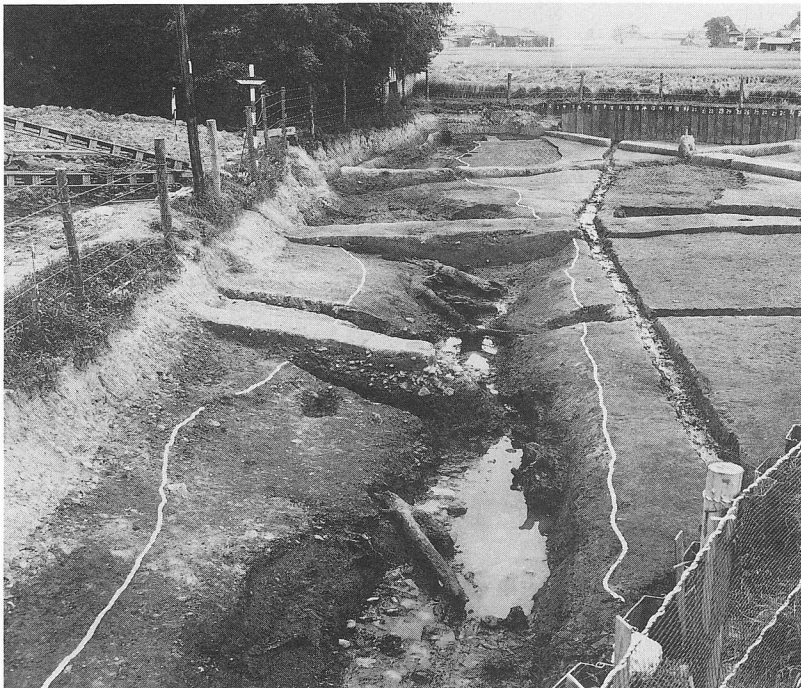


写真 16 SR01 掘削状況

写真 17

SR02

草本質泥炭層
土器出土状況



写真 18 SR01

木製品出土状況



写真 19

旧流路の断面

(SR05)



写真 20

S D 0 3 ・ 0 4

等 掘 削 状 況

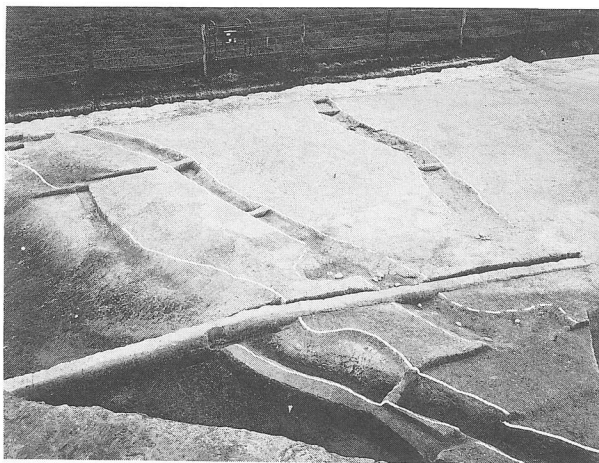


写真 21

土 取 り 跡

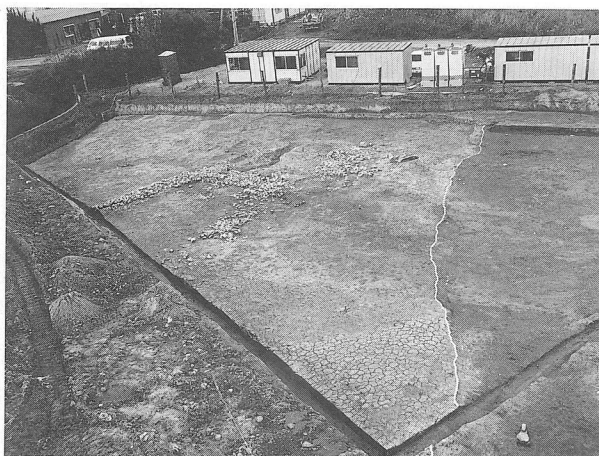


写真 22

段 丘 崖

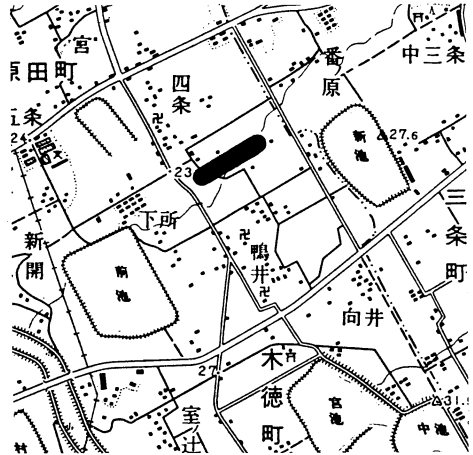
(明灰色粘質土)



3. 龍川四条遺跡B地区

本遺跡は、南北方向に傾斜する扇状地形の扇端部を占地しており、現地表面における海拔高が22m前後を測る位置に所在する。

ところで、従前より当該地については旧那珂郡に包括されていたと考えられており、いわゆる班田制下において施行された土地区画の遺構が埋没していることが推測されていた。しかも調査区を含む広範囲に方形に区格された地割をみることができることから、当時の遺構が良好に遺存することが期待されたが、調査においてはこの点を実証するには至っていない。



第8図 遺跡周辺地形図

さて、検出された主な遺構としては、掘立柱建物跡、火葬墓、土坑、溝状遺構、河道跡があるが、以下にその一部について報告したい。

(1) 掘立柱建物跡 (第1表参照)

南北方向の軸を有する舌状の微高地において、平安時代後半から鎌倉時代頃にかけて廃絶した総数12棟の遺構を検出したが、とりわけ調査区の北半部において集中して構築されている状態を認めることができる。

ところで、この事実は本集落の構造上の特異性を的確に示唆していると考えることができよう。

すなわち南半部検出のS B 01は集落内における唯一の総柱 (S B 06は柱穴が小規模であり、柱数が少ないことからS B 01とは同一の使用形態は考えられないであろう。)による建物跡であり、北半部の同遺構とは明らかに性格を異にすることが判る。したがって従前より上記の遺構については倉庫様の使用形態が復元されることから、集落域の北半部を居住域、南半部を貯蔵あるいは収蔵のための空間と理解することが可能である。

(2) 火葬墓

隅丸長方形の平面形態を呈し、遺存する規模は長径160cm、短径105cm、最深部11cmを測る。

床面の調査時においてヒトの骨格の一部と考えられる骨片と被熱された粘土塊および炭化した植物質の物質を採取することができたことから、本遺構が火葬後の埋葬施設として構築されたことが容易に推測できるのである。なお深度が極めて小さい点から、既に遺構の大部分が失われていると考えられ、上部構造の存否については判然とし難い。

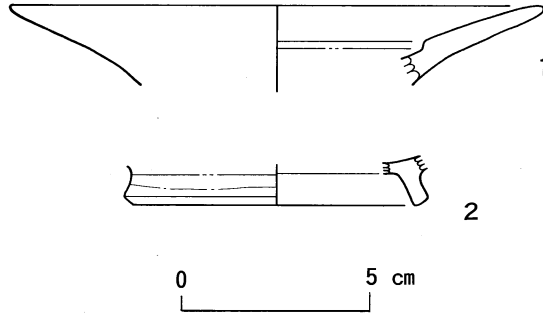
(3) 河道跡

微高地形の東縁辺部を廻流する河道跡の調査により、縄文時代晩期中頃の遺物 (縄文土器、打製石斧、磨石、石鏃) を採取している。

第 1 表 掘立柱建物跡一覧表

規模：()内単位cm

| 遺構名称 | 略称 | 規模 | | 主軸方位 |
|------------|--------|----------|----------|------|
| | | 梁行 | 桁行 | |
| 第1号掘立柱建物跡 | S B 01 | 3間 (660) | 4間 (930) | |
| 第2号掘立柱建物跡 | S B 02 | 1間 (380) | 2間 (405) | |
| 第3号掘立柱建物跡 | S B 03 | 2間 (405) | 4間 (880) | |
| 第4号掘立柱建物跡 | S B 04 | 1間 (130) | 2間 (425) | |
| 第5号掘立柱建物跡 | S B 05 | 1間 (340) | 3間 (625) | |
| 第6号掘立柱建物跡 | S B 06 | 2間 (300) | 2間 (515) | |
| 第7号掘立柱建物跡 | S B 07 | 1間 (320) | 3間 (550) | |
| 第8号掘立柱建物跡 | S B 08 | ? | 3間 (530) | |
| 第9号掘立柱建物跡 | S B 09 | 1間 (355) | 2間 (640) | |
| 第10号掘立柱建物跡 | S B 10 | 2間 (355) | 3間 (600) | |
| 第11号掘立柱建物跡 | S B 11 | 1間 (325) | 2間 (335) | |
| 第12号掘立柱建物跡 | S B 12 | 1間 (385) | 2間 (480) | |



第 9 図 灰釉陶器実測図

第 9 図は微高地の東斜面部に堆積する遺物包含層より出土した灰釉陶器である。1 はいわゆる段皿であり、2 については碗形の器形が考えられる。なお、胎土の観察により、前者に白色に発色する精緻な材料が用いられている事実から、前者を美濃窯、後者を猿投窯産出の資料と判断したが、この点については後日専門家の意見を聴きたいと考えている。



写真 23 掘立柱建物跡 (1)

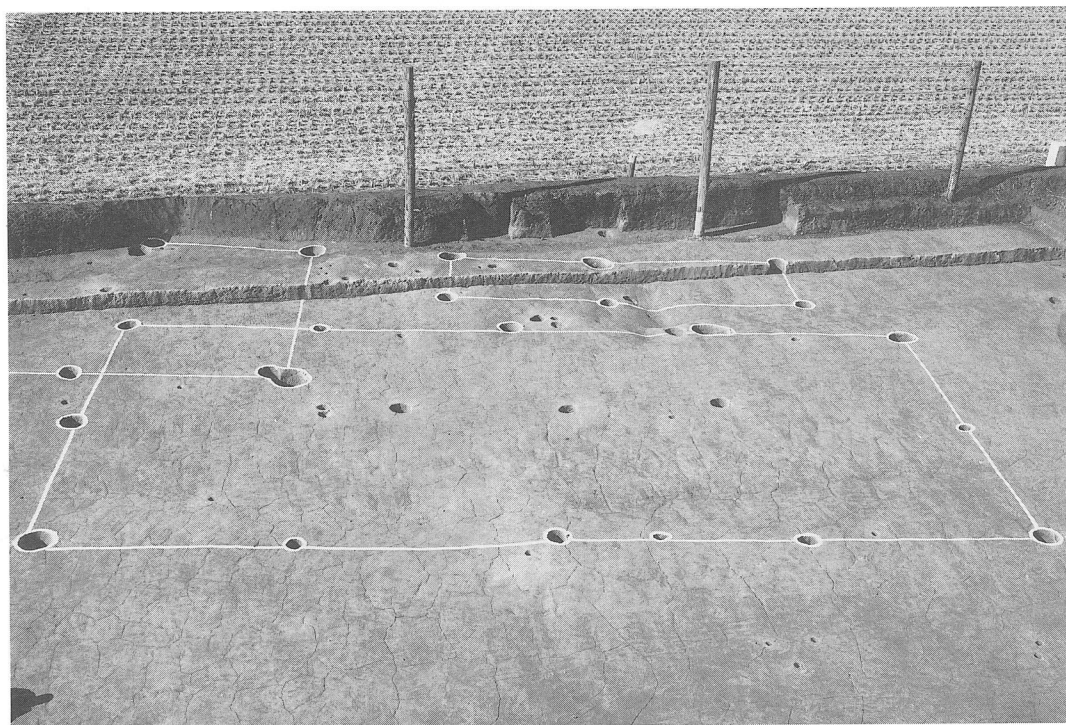


写真 24 掘立柱建物跡 (2)



写真25 掘立柱建物跡伴出遺物

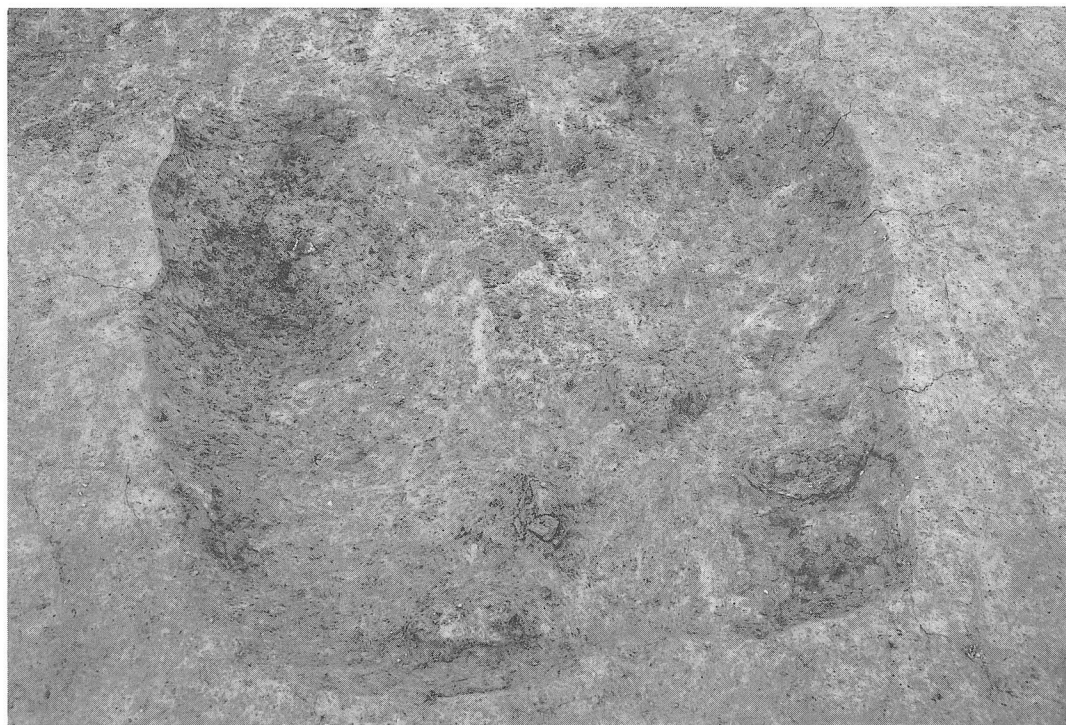


写真26 火葬墓

4. 三条番ノ原遺跡

調査の概要

本遺跡は、善通寺市との境に位置し、昭和63年度調査では、条里の溝等が確認された遺跡である。

今年度調査は、住宅未退去部分1,300㎡であり、また退去後の調査ということで連続して調査を実施することができず期間を2回に分けて実施し、竪穴住居跡3棟・土坑1基・溝状遺構2条を確認するにとどまった。竪穴住居跡は、出土遺物等により、3棟とも弥生時代後期と推定している。うち2棟については、住居の中央をややはずれている所に一部焼土が確認され、炉跡と考えられる。住居の大きさは、SH01 4.5×5、SH02 4×4.5、SH03 4×4.5（いずれも単位はm）。溝状遺構は、2条を検出するにとどまった。年代は出土遺物等により、弥生時代後期と思われ、竪穴住居跡の年代におおむね合致する。



第10図 遺跡周辺地形図

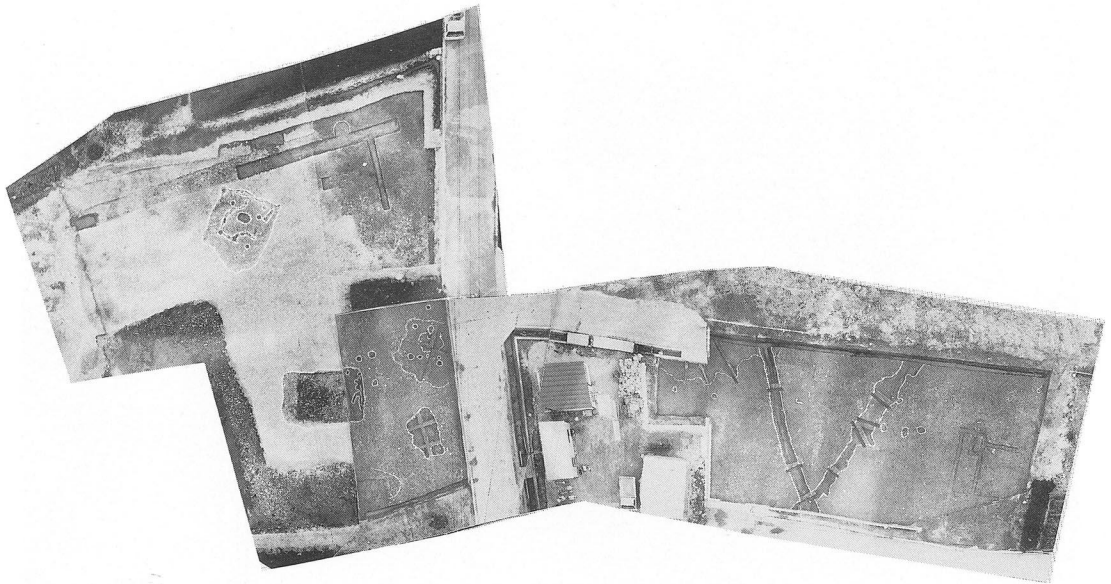


写真27 調査区全景

5. 郡家原遺跡

調査の概要

当遺跡は、県道善通寺府中線と市道黒鳴八幡下線に挟まれ、また、昨年度調査を実施した三条黒島遺跡・郡家一里屋遺跡に挟まれている。昨年度調査により、斎串・黒色土器・緑釉陶器・墨書土器・弥生土器・石製品（石鏃・砥石・石臼・スクレイパー等）等、多種多様の遺物が出土し、また、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・湧水池状遺構等の遺構が密集して検出された。

今年度の調査は、昨年度調査を実施できなかった宅地部分 2,600㎡ についての調査であり、一調査区あたり

600㎡前後の小区画となった。住宅退去後の調査のため、調査を2回に分けて実施せねばならなかった。遺構については、昨年度調査を終了していた隣接地区の状況から、ある程度の予想のうえに調査を実施したが、ブロック塀・住宅の基礎等が遺構面に達しており、幾つかの遺構がこれらによって破壊され、遺構の状態は決して良好とはいえなかった。

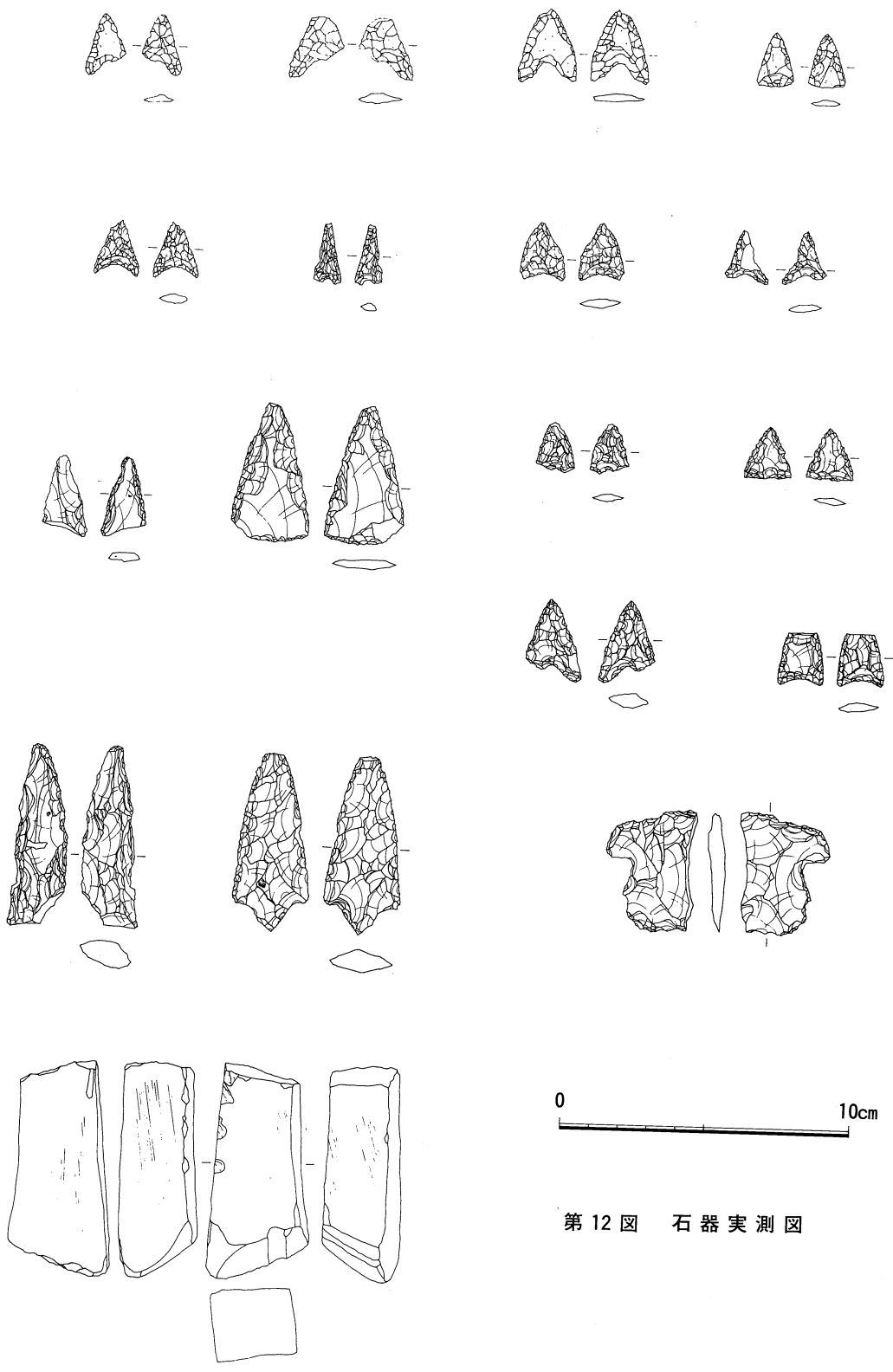
昨年度当初掘立柱建物群跡を確認したⅠ区東隣の地区では、掘立柱建物跡1棟を確認したが、一部を現在使用されている用水路に切られており、建物の規模・性格・Ⅰ区建物群との関係等詳細は今後の検討となった。また、特異なプランを持つ掘立柱建物跡(Ⅲ区)が確認された隣接地区では、この建物に伴う(関連する)と思われる建物跡は確認することができなかった。昨年度調査分を含めた当遺跡における掘立柱建物跡の配置については、おおむね第13図のとおりとなった。

遺物については、土師器・須恵器の細片がほとんどであり、時代を特定しうる資料となるものは皆無に近い状態であった。また、石製品については、昨年度に比べると数量的には少なくなったものの約20点程の製品（器種不明品も含む）が出土したが、その大半はサヌカイト製の石鏃であった。

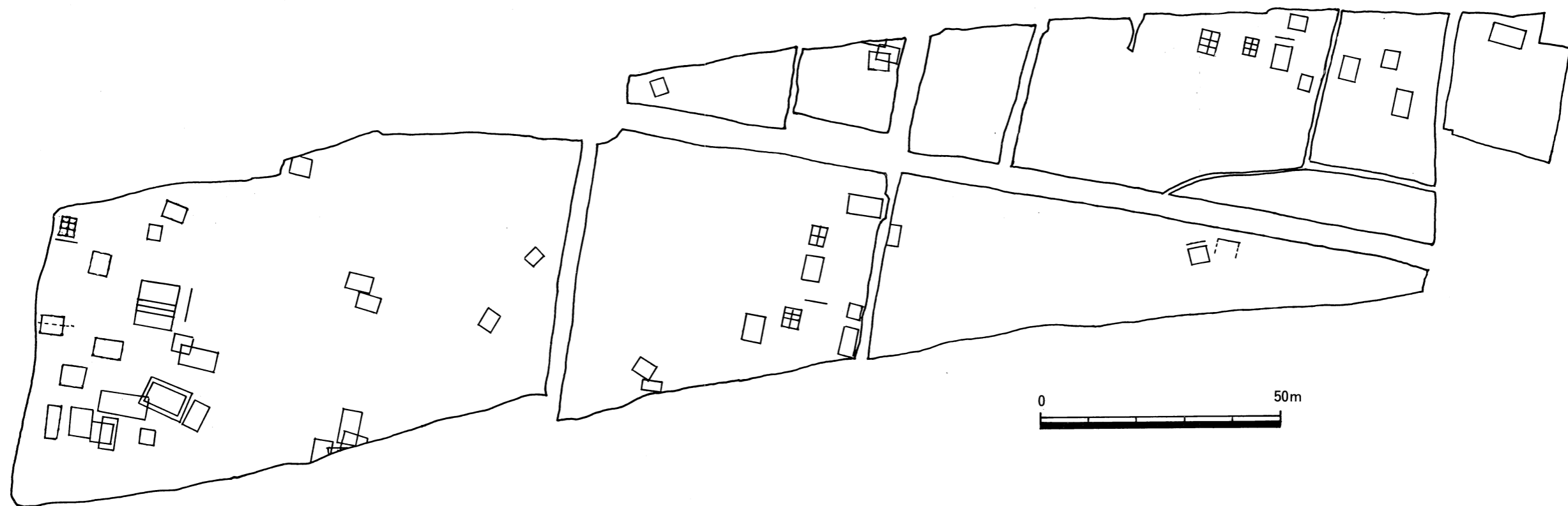
今年度調査を含め、調査対象面積 19,699㎡の調査が終了したわけであるが、今後、各遺物について検討を加え、郡家原遺跡の全容を解明していきたい。



第11図 遺跡周辺地形図



第 12 图 石器实测图



第13図 掘立柱建物跡配置図

6. 郡家一里屋遺跡

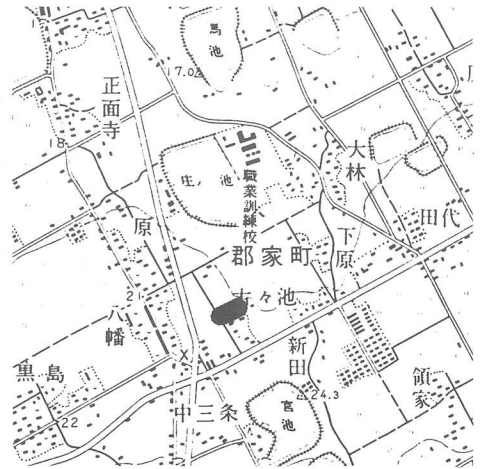
調査の概要

当遺跡は、西を県道丸亀三好線、東を市道古々池下原線に挟まれており、前年度調査により緑釉陶器を数多く出土した遺跡である。

今年度は、未買収地であった5,150㎡、住宅未退去であった1,300㎡の合計6,450㎡が調査対象であった。遺構については、前年度調査により東側調査区の未買収地には自然河川(SR)、西側調査区の住宅未退去地には掘立柱建物・溝状遺構等が予想されていたが、西側調査区では掘立柱建物を確認することができなかった。

東側調査区のⅡ区SR01からは石包丁・石鋸等石製品が数点出土したが、年代決定できるような遺物は皆無に近い状態であった。西側調査区の住宅未退去部分では、前年度調査により、溝状遺構(条里に伴うと思われるものを含む)があることが判明していたが、生活排水口・浄化槽等により遺構面が破壊(攪乱)され、良好な状態で確認することができなかった。また、土坑については近世及び近・現代のものが確認された。

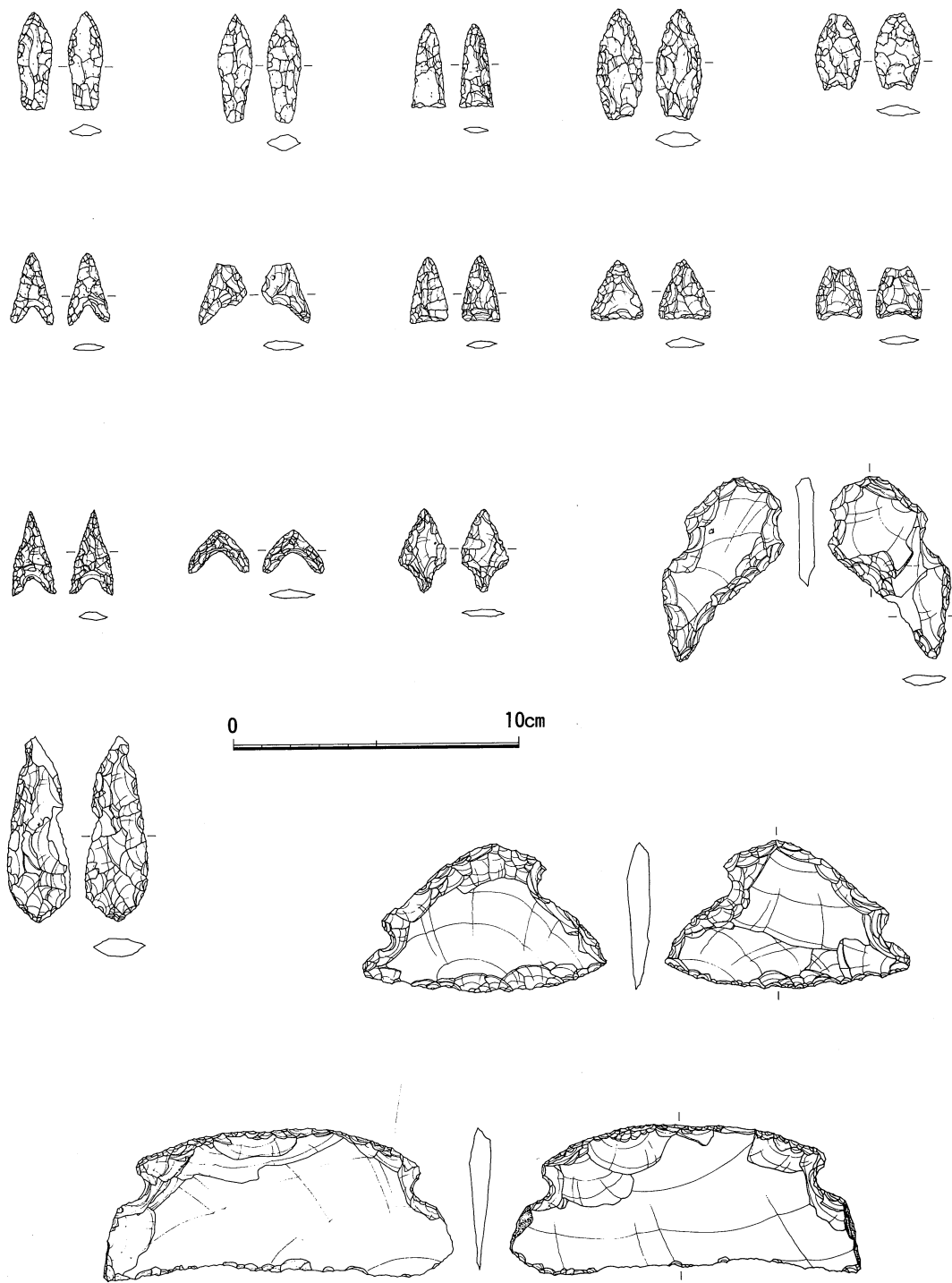
今年度調査は、自然河川・溝状遺構・近世及び近・現代土坑を数多く確認するにとどまった。



第14図 遺跡周辺地形図



写真28 遺構検出状況

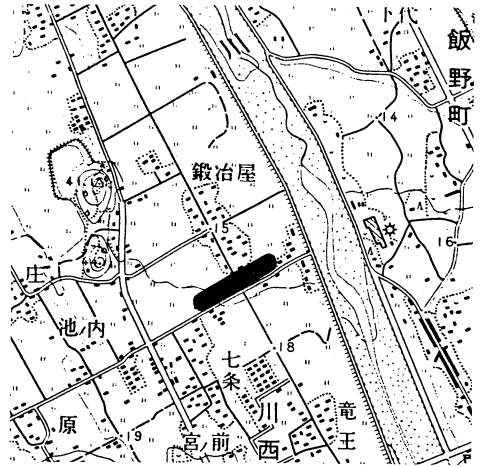


第 15 图 石器实测图

7. 川西北・鍛冶屋遺跡

当遺跡は丸亀平野の東部に位置する。すぐ東には土器川が流れているが、洪水による砂の堆積や河川による浸蝕は見られない。調査区の大部分で耕作土直下に灰黄色粘土層(地山)が広がっており、すべての遺構はこの上面で検出された。

検出された遺構は溝が中心で、その時期は弥生時代から現代にまでわたっている。その中で推定条里坪界線に一致するものがⅠ区②S D 01, さらにその二町(1町≒109m)東のⅣ区①S R 01(溝の可能性ある)である。Ⅰ区②の溝は出土遺物より平安時代頃に埋没



第16図 遺跡周辺地形図

したと考えられるが、Ⅳ区①のものは少なくとも近世までは機能していたと考えられる。いずれも現在の用水路と重なる。Ⅳ区②では平安時代から中世頃の、推定条里坪界線間の中間に位置する溝が検出されている。その他、条里方向に合う溝にⅡ区①S D 03, Ⅲ区①S D 08がある。S D 03は推定条里坪界線間の中間よりやや東側に位置し、湧水池状遺構から水を流したものと思われる。時期は奈良時代から平安時代と考えられる。S D 08も平安時代のもので調査区北端で二又に分れる。この二条は他の条里方向の溝に比べ、規模が小さく、途中で屈曲する。Ⅳ区①S R 01のすぐ東側では近世以降のL字形に曲がる溝が検出されている。埋土より多数の陶磁器類、巴瓦が出土し一部には石積みもみられた。溝の付近では同じく近世以降の集石土坑や甕の埋められた土坑、溝の東側でも近世以降の掘立柱建物が数棟検出されている。その他の主な遺構としては、先に触れた深さ1.1mの湧水池状遺構、中世以降の掘立柱建物2棟、現代の石組井戸2基等がある。

遺物の出土量は全体に少なく、細片が多いが、Ⅲ区②の古墳時代の溝から完形に近い須恵器の杯、甕、瓶、高杯の脚部等が、同じくⅢ区②の弥生時代の溝から磨製石斧が出土した。又、Ⅰ区包含層から磨製石庖丁が出土した。

当遺跡は溝が中心で、遺物が少なく、水田として利用されたと考えられる。また、推定条里坪界線上に溝が二条検出され、推定されていた条里プランを実際に裏付けた。その他の条里方向の溝が、条里制と関連するのか、関連するとすれば、どのような機能を果たしていたのか、今後の検討課題としたい。

- 弥生時代の遺構と考えられる
- 古墳時代の遺構と考えられる
- 奈良、平安時代の遺構と考えられる
- 古代末から中世の遺構と考えられる
- 近、現代の遺構と考えられる



※上記以外は只今検討中である。

第17図 遺構配置図一Ⅱ区一

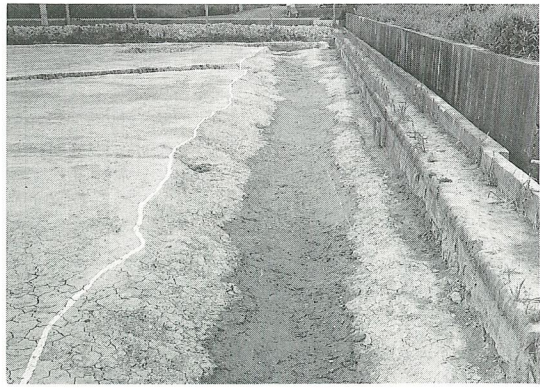


写真29 I区②SD01

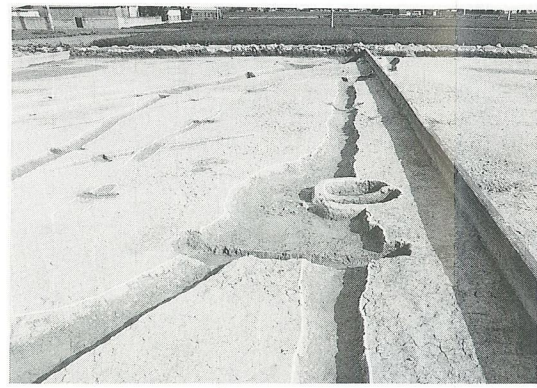
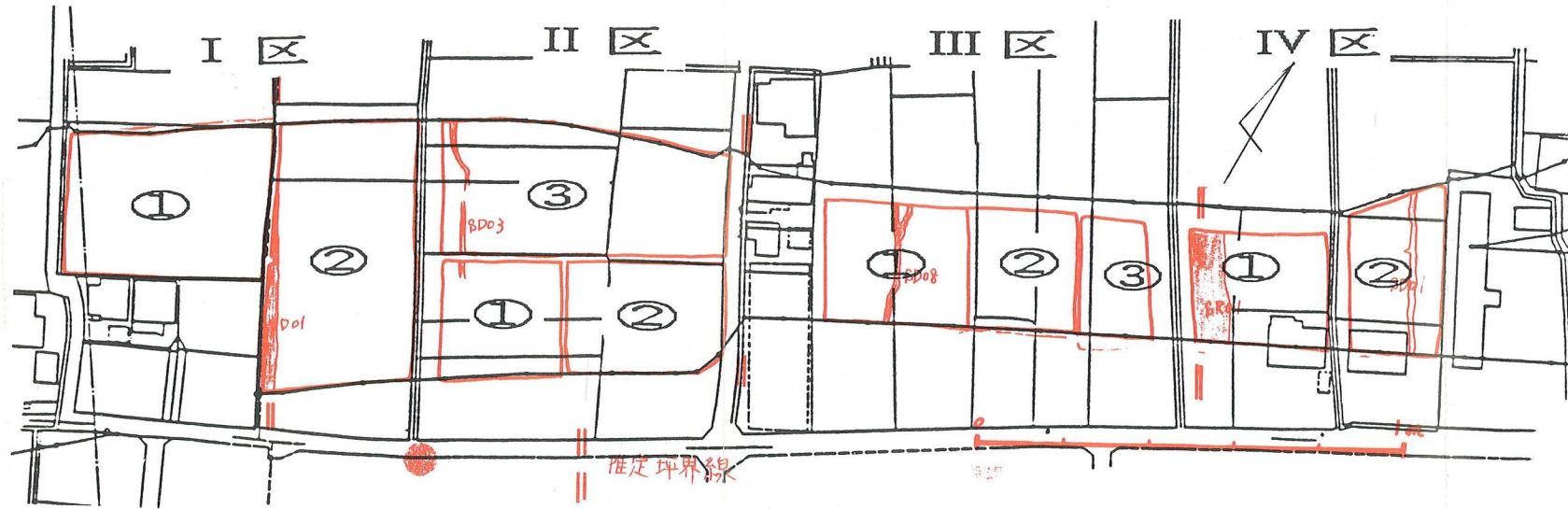


写真30 II区③SD03



第18図 地区割図及び川西北・鍛冶屋遺跡にみられる条里方向の溝

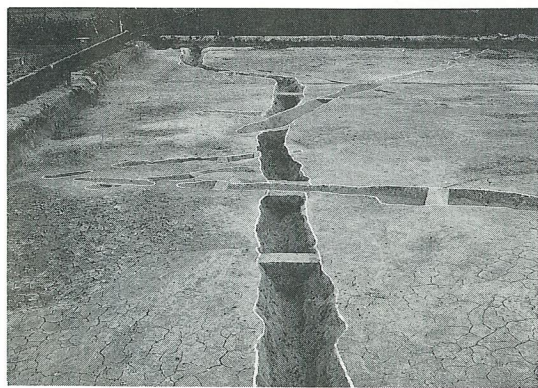


写真31 III区①SD08

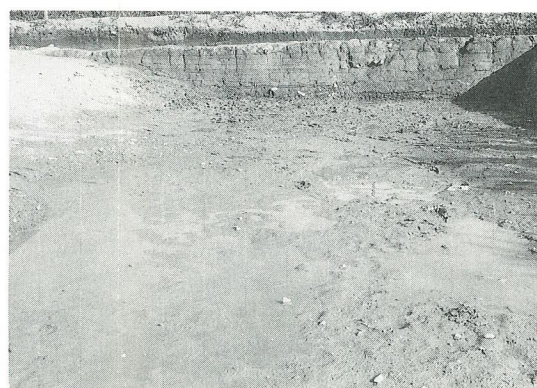


写真32 IV区①SR01



写真33 IV区②SD01



写真 34 I 区① 全景 (東から)

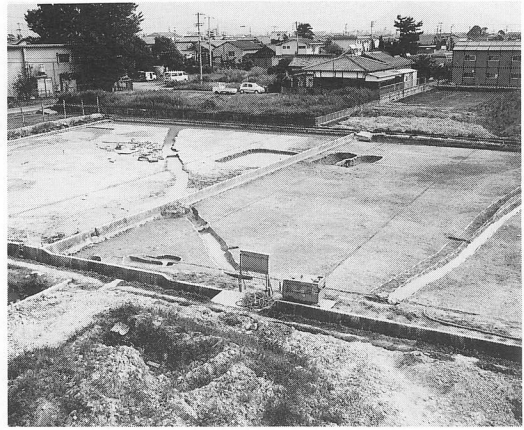


写真 35 I 区② 全景 (東から)



写真 36 I 区① 貯水遺構
(モルタル)

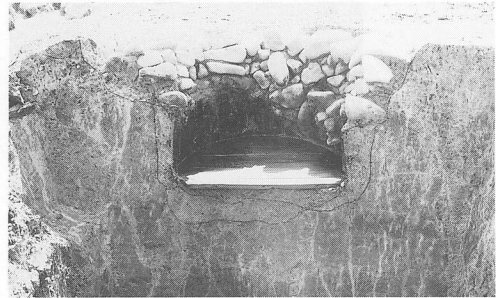


写真 37 I 区① 貯水遺構
(木タル)

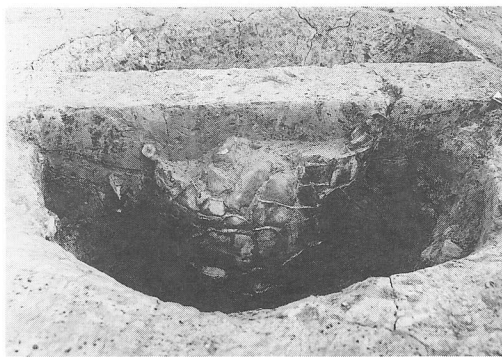


写真 38 I 区① 大甕出土状況
(野ツボ)



写真 39 I 区② S D 01
土師皿出土状況



写真 40 II 区① 全景 (北から)

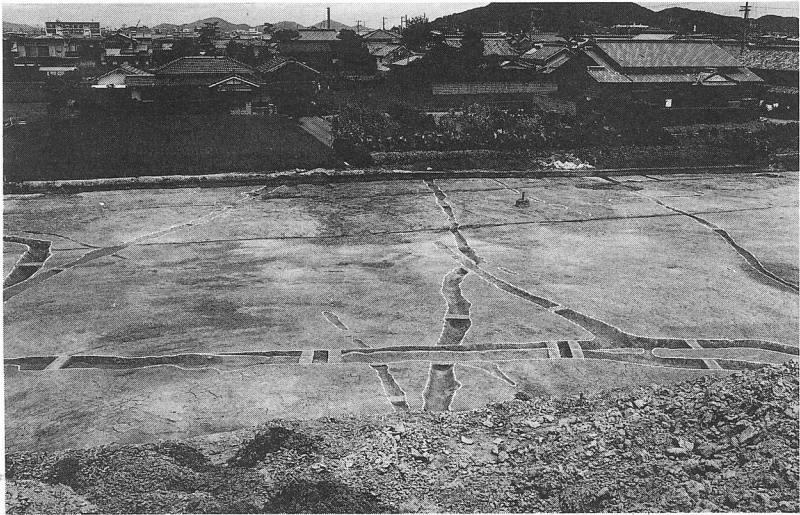


写真 41 II 区③ 全景 (南から)

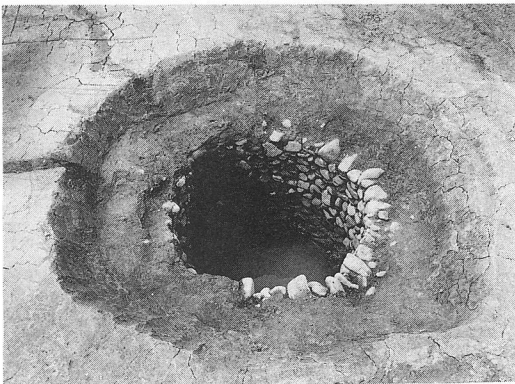


写真 42 II 区③ S E 0 2 (東から)

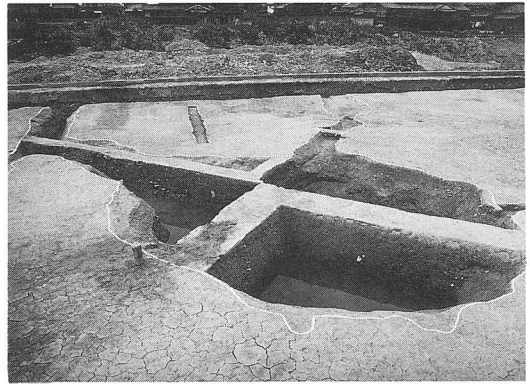


写真 43 II 区① S X 0 1 (南から)



写真 44 Ⅲ区① 全景 (東から)

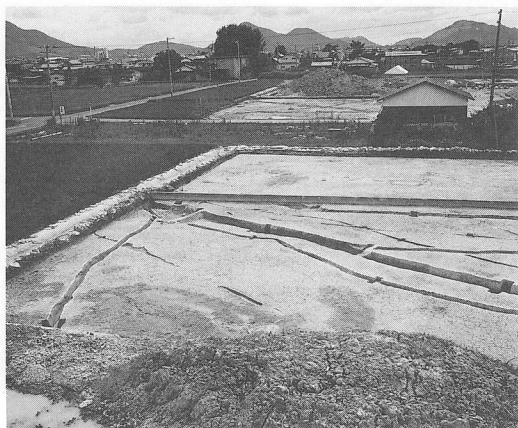


写真 45 Ⅲ区② 全景 (東から)



写真 46 Ⅲ区② 弥生土器底部
出土状況 (溝から)



写真 47 Ⅲ区② 甕出土状況 (溝から)

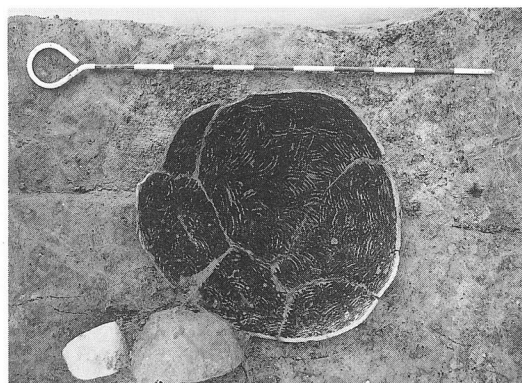


写真 48 Ⅲ区② 甕出土状況
(溝から)



写真 49 Ⅲ区② 甕出土状況 (溝から)



写真 50 IV区①全景(西から)

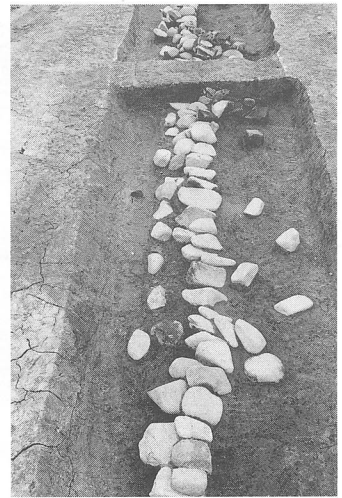


写真 51 IV区①
L字型溝石組



写真 52 IV区① L字型溝遺物
出土状況

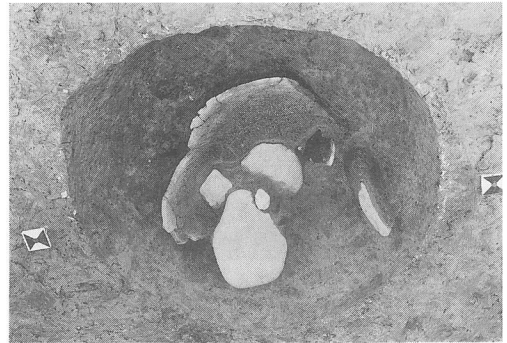


写真 53 IV区①土坑甕出土状況

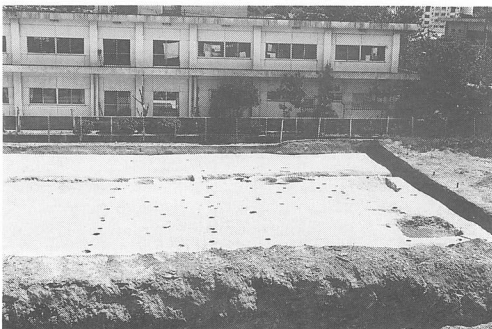


写真 54 IV区②近世掘立柱建物跡



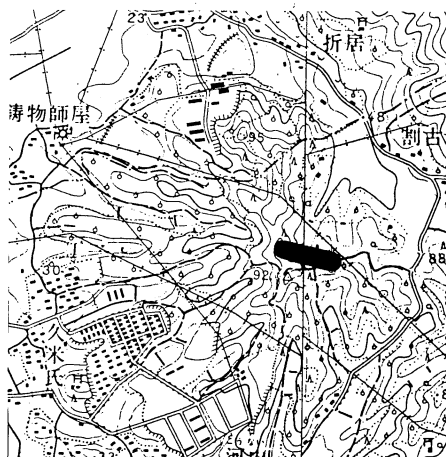
写真 55 IV区②SD01
須恵器出土状況

8. 飯山一本松遺跡

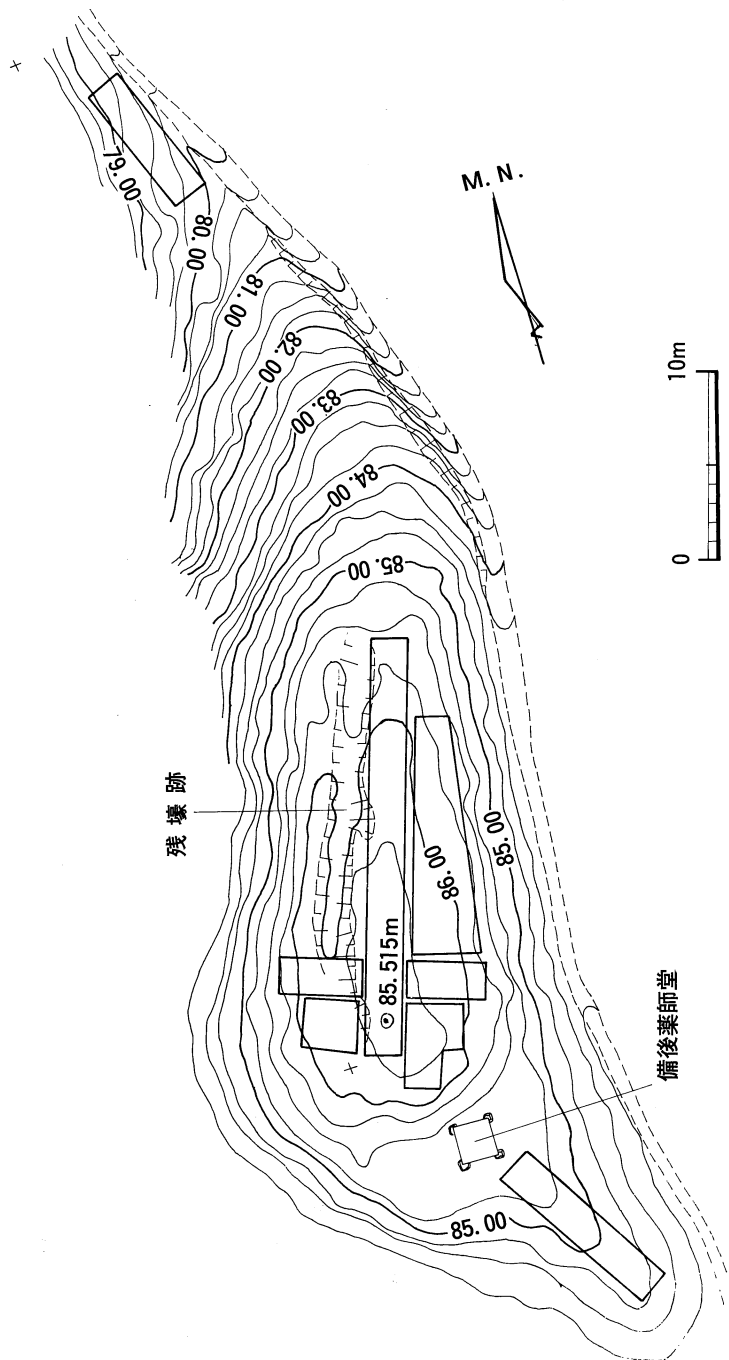
飯山一本松遺跡は、城山の南裾に広がる標高約85mの低丘陵上に所在する。遺跡からの眺望は極めて良好で、飯山を正面に据え、大東川流域の平野部から遠く瀬戸内海を望むことが出来る。分布調査によって若干の遺物が採集され、また地元住民の信仰の対象になっていた備後薬師堂についての詳細な内容を得ることを目的として調査を行った。調査対象地に尾根上の2ヶ所を選定し、東をB地区、西をA地区と呼称した。以下各地区の調査結果の概要について報告する。

A地区では、丘陵頂部よりやや西に下った斜面で、丘陵頂部を取り巻くように、長さ約22m、幅約1.5m、深さ約0.4mを測る溝状の掘り形が検出された。遺構内からの遺物は皆無であったため、時期や性格などの詳細は不明である。しかし、周辺に第2次対戦中の塹壕があったとの伝承があり、この溝状の遺構については、こうした塹壕跡と考えられる。また、調査目的の一つの備後薬師堂については、近代以降と思われる陶磁器・瓦が出土したのみで、建立時期を古く遡らせる遺物の出土は認められなかった。近代以降に建立時期を考えると良いであろう。その他、丘陵東斜面で認められた、塹壕掘削時の排土と思われる土層中より、弥生土器・須恵器片数点が出土した。他に遺構等は認められず、これらの遺物の性格については不明である。

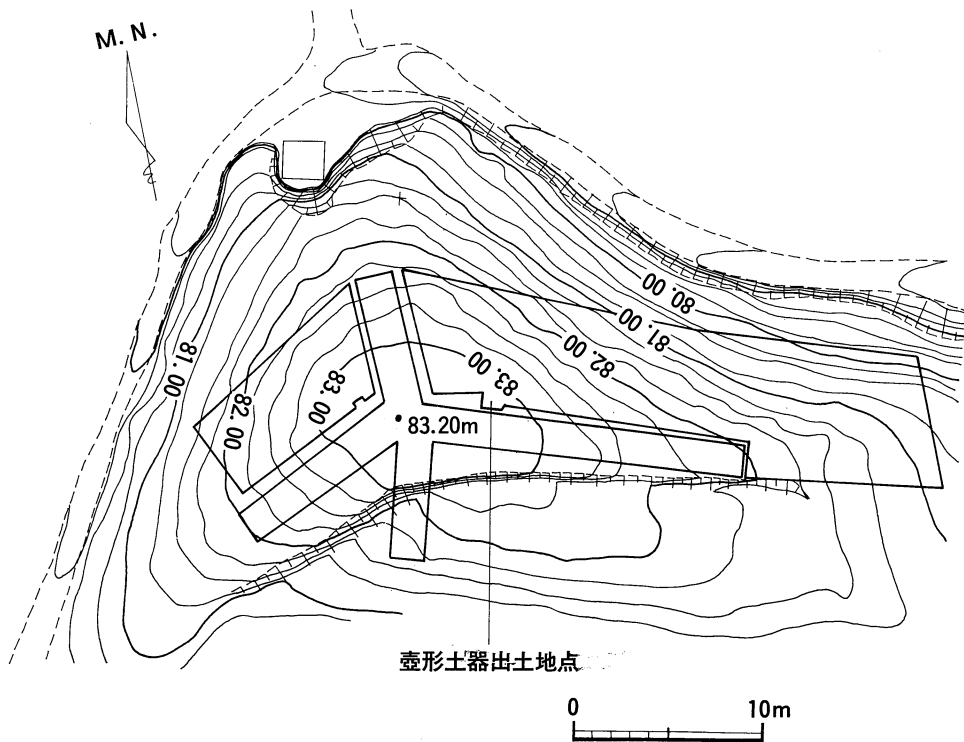
B地区南斜面は桃畑として大きく開墾されており、耕作土下で花崗岩の岩盤が検出されるといった状況で、遺構は皆無であった。北斜面は幾分旧地形が保たれているが、表土下で花崗岩風化バイラン土の地山層が検出され、包含層等は流出しているものと思われた。頂部よりやや東に下った位置の地山面上で、径20cm程度の明確な掘り形を持たない皿状の凹みが検出され、ほぼ完形の弥生時代の壺形土器が横倒しになったような状態で検出された(SX01)。時期は、弥生時代後期初頭頃と思われる。その他周辺の表土中より弥生土器片が数点出土している。他に明確な遺構は無く、遺物量も少なかったため、遺構・遺物の性格などについては不明瞭である。一応、壺棺墓等の可能性を考えておきたい。



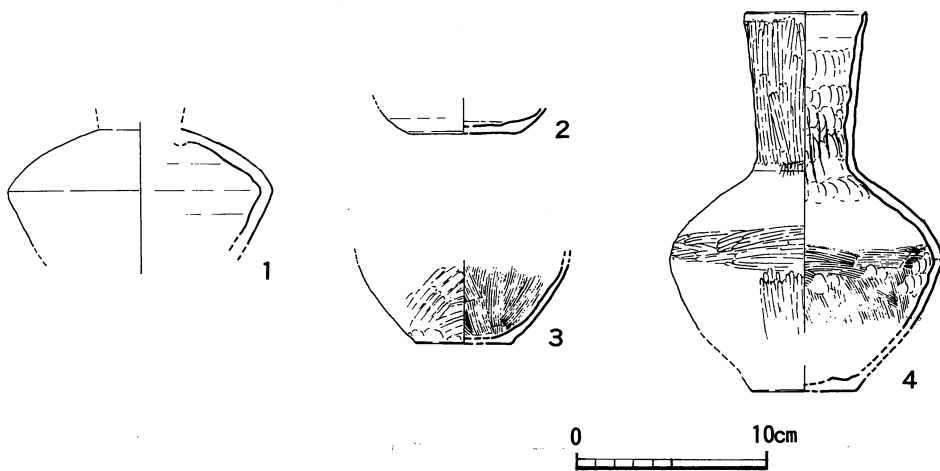
第19図 遺跡周辺地形図



第 20 図 A 地区トレンチ配置図



第 21 図 B 地区トレンチ配置図



第 22 図 出土土器実測図

| 番号 | 調査区 | 遺構名 | 種別・器種 | 法量(cm) | 胎土 | 色調 | 特徴等 |
|----|-----|-------|----------|--------------------|--------------------------|------|---|
| 1 | A | 甕塚排土中 | 須恵器・長頸壺 | | 密 | 灰褐色 | 内・外面 回転ナデ |
| 2 | | | ・底部 | (底) 5.4 | 密 | 濃青灰色 | 底部外面 不整方向ナデ |
| 3 | | | 弥生土器・底部 | (底) 5.0 | 密 0.1~1.5mmの石英・ 黒雲母粒含 | 橙褐色 | 外面 タタキメの後ナデ 内面 タテハケ |
| 4 | B | SX01 | 弥生土器・長頸壺 | (口) 6.4 (底) 5.6 | 密 0.1~2.0mmの石英・ 金雲母粒含 | 黄褐色 | 口縁部外面 タテハラミガキ 体部外面 タテハラミガキの後中央部ヨコハラミガキ 体部内面 ハケメ |

第 2 表 遺物観察表



写真 56 A 地区 遠景 (東から)
中央が調査区背後は城山南麓

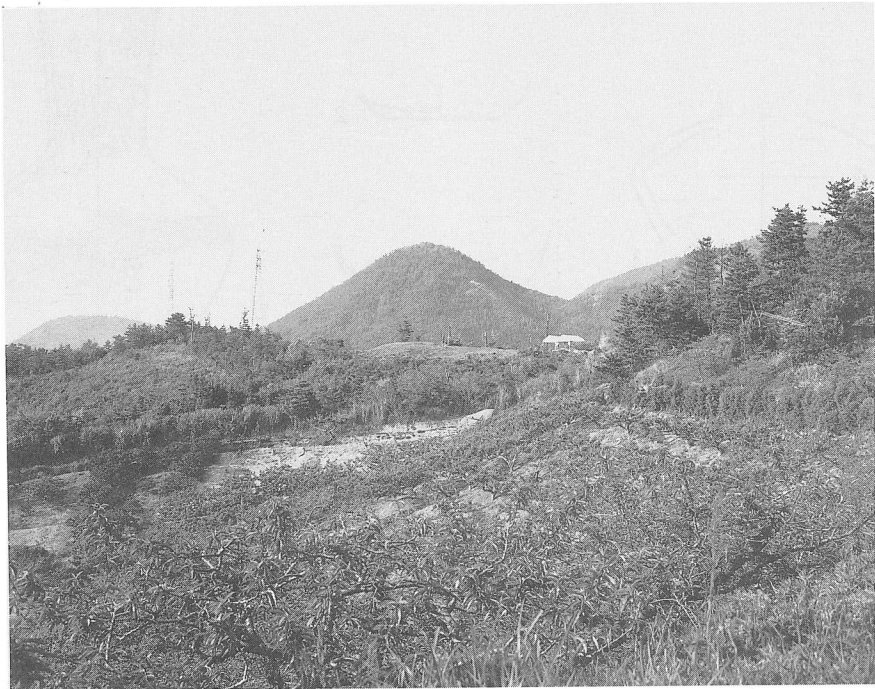


写真 57 B 地区 完掘状況全景 (東から)
表土直下で地山の花崗岩風化・バイラン土が認められた

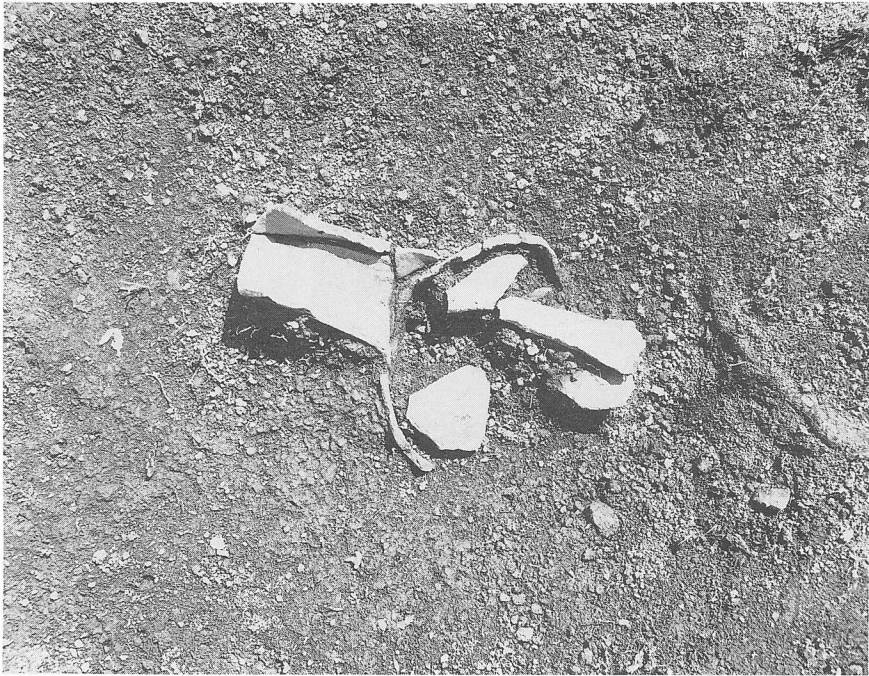


写真 58 B 地区 SX8901 遺物出土状況 (東から)
左が口縁部、浅い凹地に横だおしの様な状況で出土した



写真 59 A 地区 塹壕跡完掘状況 (南から)
右手のピット状の掘り形は木の根の攪乱

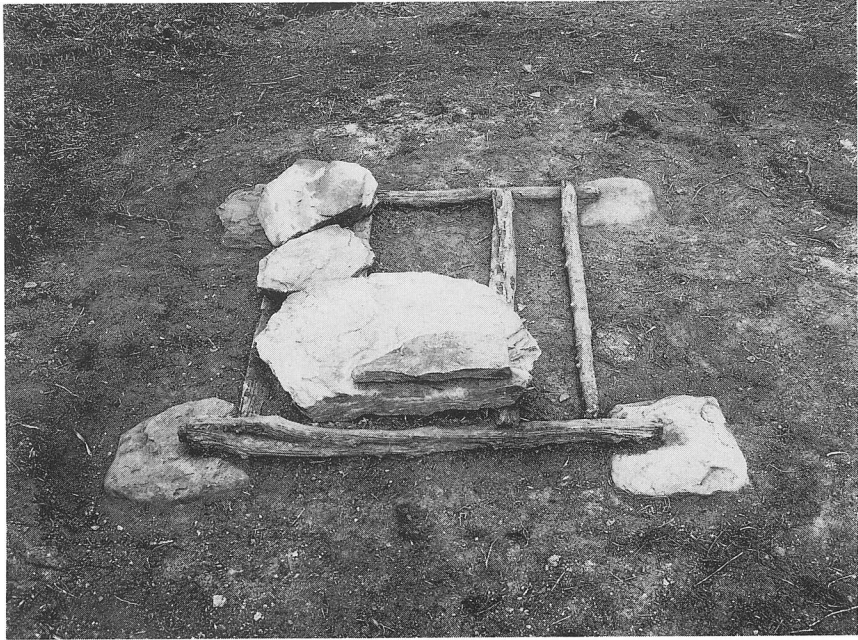


写真60 備後薬師堂調査中状況(西から)

9. 綾南奥下池南遺跡

遺跡の位置 (第23・24図・写真61)

奥下池南遺跡は、鷲ノ山(標高 321m)南麓尾根斜面の須恵器窯を含む遺跡である。綾南町陶を中心とした4km四方の地域には、約80基の須恵器の窯跡と約20基の瓦の窯跡が飛鳥時代から鎌倉時代にかけて操業しており、十瓶山窯跡群(陶窯跡群)と総称されている。この遺跡は十瓶山窯跡群の北端にあたり、予定路線が検出された窯跡を分断して通るため、今回調査できたのは窯跡の一部であった。

遺構 (第25～27図・写真62～69)

調査では、窯跡の本体(窯体)と付属する施設が検出された。

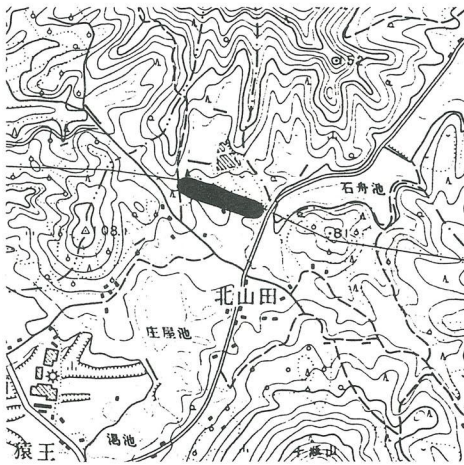
窯体の構造は、地面に床を掘り込み、粘土を貼って天井を構築しており、床に25°前後の傾斜がついていることから、半地下式登り窯と呼ばれているものである。窯の燃料を燃やす燃焼部と製品を詰める焼成部の一部は、路線外のため調査できず、煙出しの煙道部は後世の開墾により破壊されていた。このため、検出できたのは焼成部の一部分に留まったが、路線外の水路に露出していた窯の断面を観察することにより、全長7.7m・幅1.7m程度の規模が復元できよう。また壁は粘土を塗り込み、床は砂を敷くなどの作業をすることにより、操業中に修復を行っていたと分かった。

窯体の付属施設としては、窯の側面に掘られた周溝や、窯の上方で斜面を削って平坦面を造成した落ち込み状遺構がある。その機能は充分には明らかにできないが、周溝は窯体周辺の排水機能を果たしていたと思われ、落ち込み状遺構は製品の選別の場であった可能性が考えられる。

遺物 (第28～30図)

検出した窯跡で生産された須恵器の種類(器種)には、鉢・壺・甕がある。量的には、甕を主体としながら鉢も一定量生産していたと見られ、壺はごくわずかの点数が確認できる程度である。この中で甕は胴長・平底の形をしており、岡山県倉敷市周辺で焼かれた亀山焼の甕と類似している。ただし、当窯跡の甕の方が胴部が細長く、また焼きあがりもよいなどの相違点がある。この甕は、ロクロに置かれた粘土板の上に粘土ひもを巻き上げ、その後羽子板形の道具(叩き板)で全体を叩きしめる工程を経て作られている。第30図12には、底の外面に製作時のロクロ板の軸受けの痕跡(下駄印)が残されている。

これらの須恵器は、十瓶山窯跡群で今までに発掘された窯跡との比較により、ほぼ12世紀に生産されたものと考えられる。この時期は古代から中世への転換期にあたり、焼き物もそれぞれの特性の範囲内で民衆の欲求に応え、特産品化してゆくとされている。当窯跡の須恵器も、そのような時代のただ中で、特産品的な性格への傾斜を強めた焼き物と言えるだろう。今後、中世窯業という視点からのアプローチが大きな課題となろう。



第23図 遺跡周辺地形図

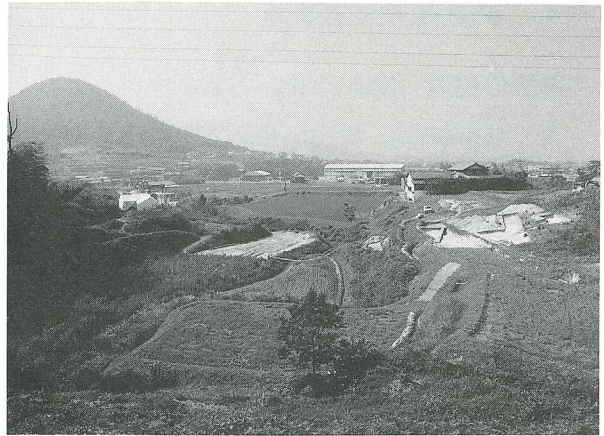
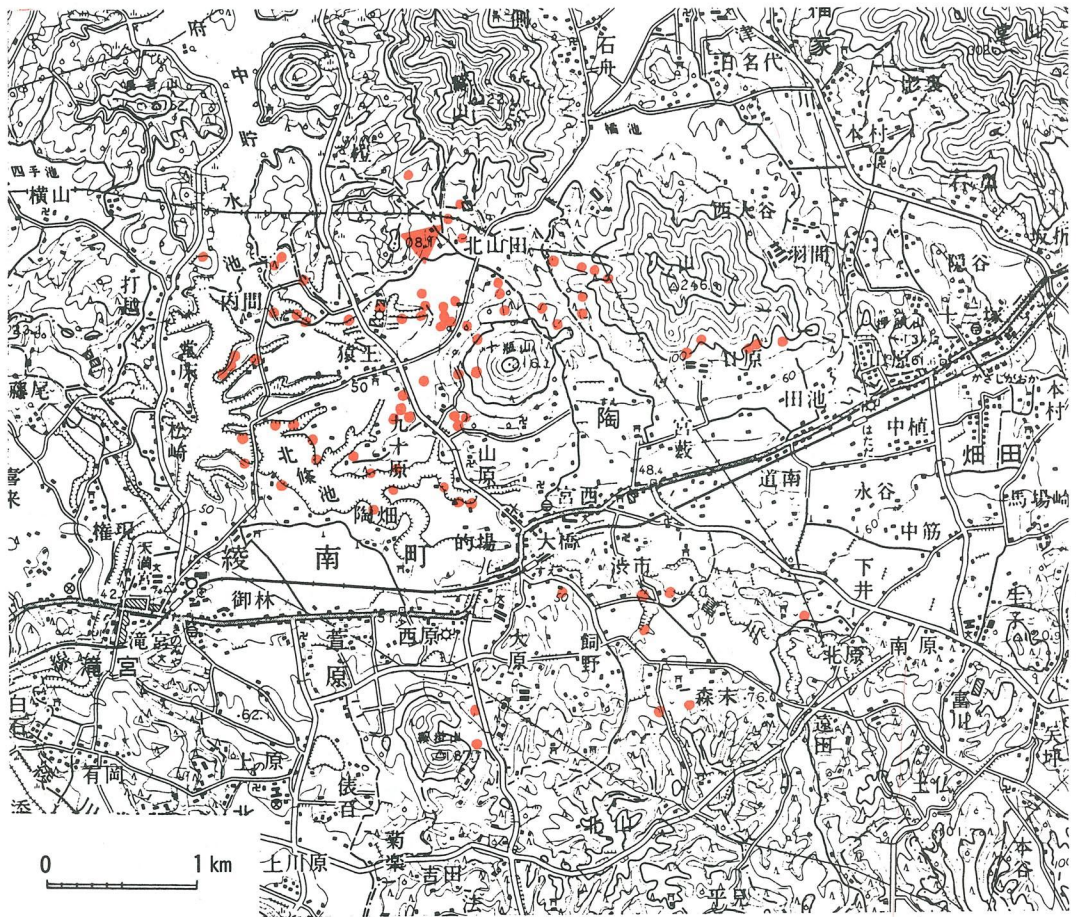
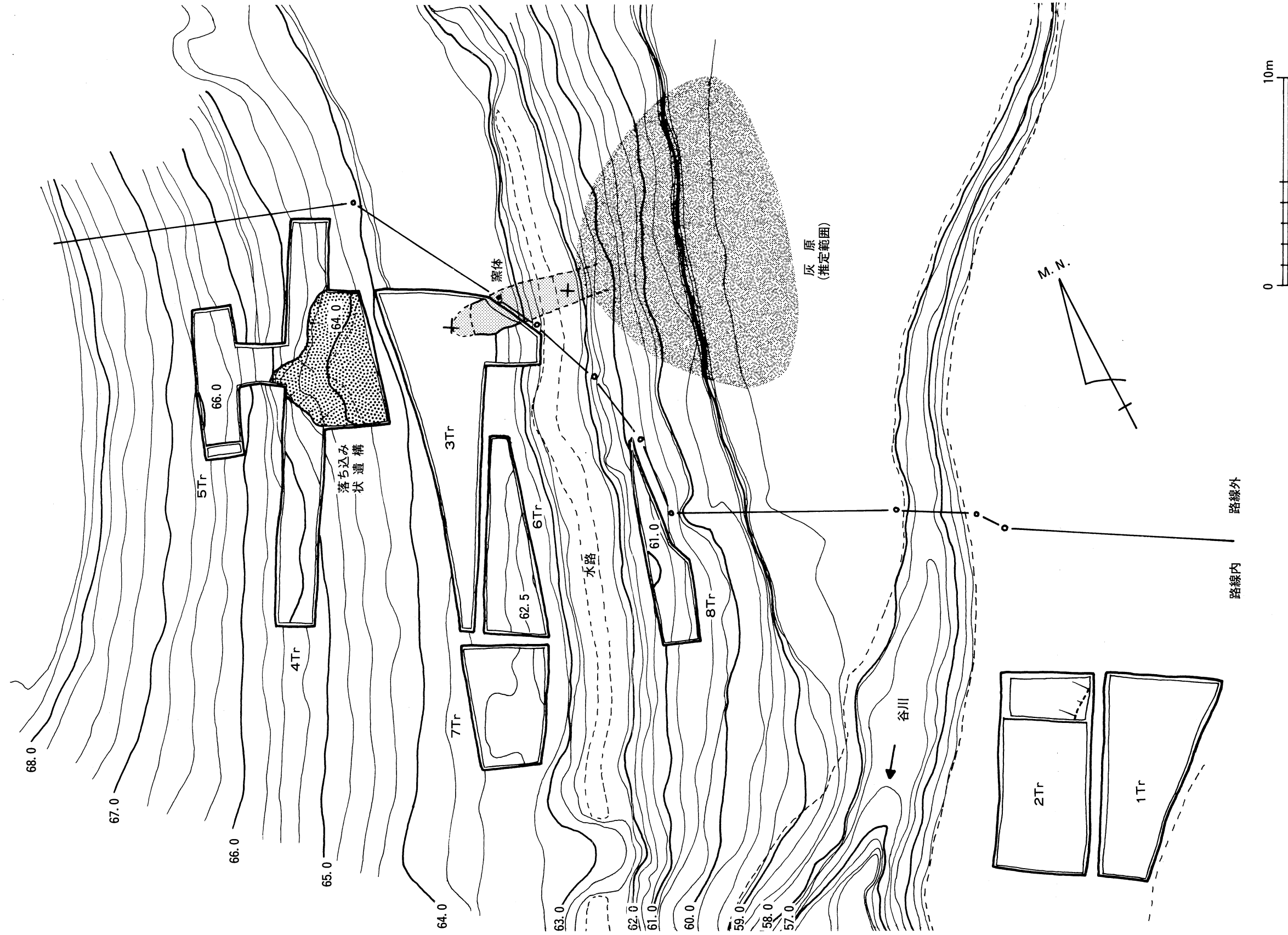


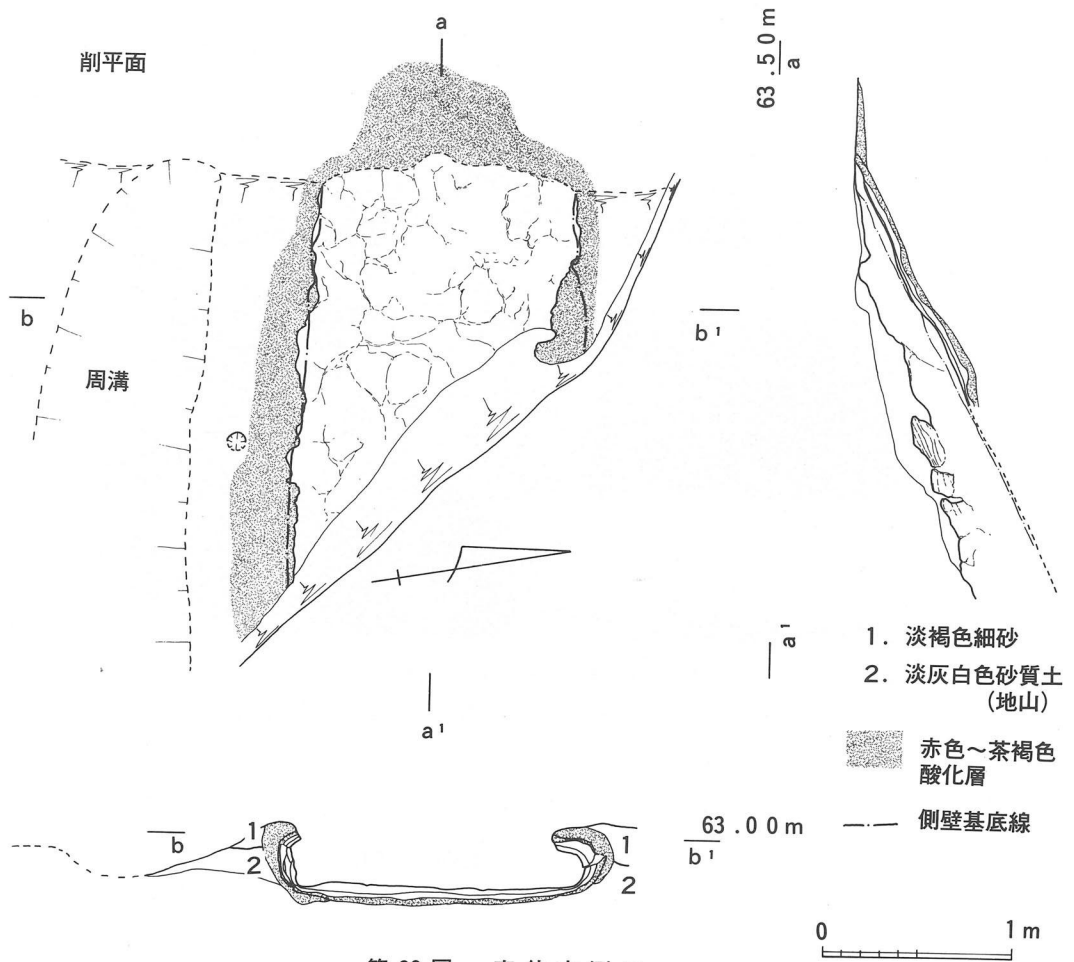
写真61 窯跡遠景(北から)
左後方に見える山が十瓶山である



第24図 十瓶山窯跡群分布図(須恵器窯のみ)
矢印のついたドットが奥下池南窯跡である



第 25 図 トレンチ・遺構配置図



第 26 図 窯体実測図

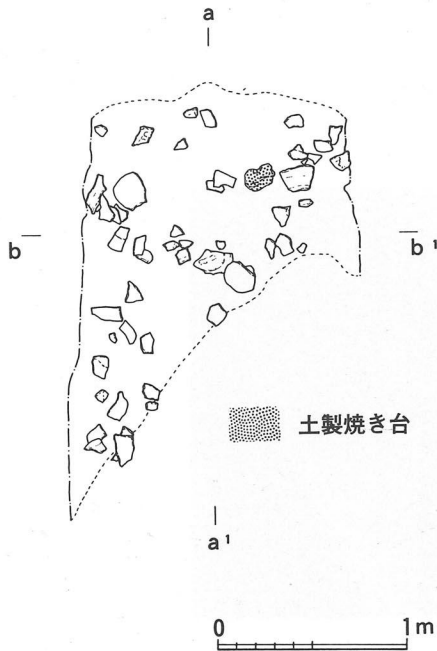


写真 62 窯体検出状況
手前 (右側) の水路法面に窯体の断面が露出していた



写真63 窯体内覆土堆積状況 (b-b'断面)
 廃窯後に天井部が崩れ落ちた様子が観察できる

遺物は二次的に焼けており、失敗品を
 焼き台に転用していたと思われる。



第27図 窯体内遺物出土状況



写真64 窯体内遺物検出状況



写真65 窯体完掘状況
手前に周溝の断面が見える

写真66 窯体完掘状況
(上方から見る)

床面から側壁へ立ち上る様子がよく分かる。推定では床から天井までの高さは0.6~1.0m程度しかない



写真67 窯体側壁細部

中央に補修にあたり粘土を塗った指の痕跡がある。この粘土にはスサが混ぜられていた。

